

彼岸原遺跡 2

—福岡県飯塚市弁分所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第241集

2013

九州歴史資料館

彼岸原遺跡 2

-福岡県飯塚市弁分所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第241集

序

本書は、県営彼岸原団地建替(第4工区)工事に先立ち実施した、飯塚市大字弁分に所在する彼岸原遺跡第3次調査の発掘調査についての記録です。

遺跡の所在する周辺は彼岸原丘陵と呼ばれ、古くから弥生時代の遺跡が数多く分布することで知られていました。しかし、これまで本格的な発掘調査が行われたことはほとんどなく、遺跡の内容についてはよくわかっていませんでした。

彼岸原遺跡における発掘調査は、平成18年度から19年度にかけて行われた、県営彼岸原団地建替(第2工区)にともなう第1・2次調査がその端緒であり、弥生時代中期後半を中心とする集落遺跡であることがすでに知られています。今回の調査でも、前回の調査に引き続いて弥生時代中期の集落跡の一部を確認し、この地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査および報告書作成にあたっては、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成25年3月29日

九州歴史資料館
館長 西谷 正

例 言

1. 本書は、平成21年度に県営彼岸原団地建替に伴い福岡県教育委員会が発掘調査を実施した、飯塚市大字弁分所在の彼岸原遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、福岡県建築都市部県営住宅課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。整理報告は、県営住宅課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。
3. 彼岸原遺跡ではこれまでに、福岡県教育委員会により2次にわたって発掘調査が行われており、今次調査は第3次調査にあたる。
4. 本書に掲載した写真は、遺構については小澤佳憲が、遺物については北岡伸一が撮影した。空中写真の撮影は熊本航空株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによりこれを行った。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は、小澤がこれを行い、発掘作業員が補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館に保管する。
8. 本書に使用した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「飯塚」を縮小・改変したものである。
9. 本書で使用した方位は世界測地系に基づく座標北である。
10. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は組織改編のため九州歴史資料館に移管された。
11. 本書の執筆・編集は小澤が行った。

目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	2
3	調査の組織	3
II	位置と環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	5
III	調査の報告	9
1	はじめに	9
2	I 区の調査	9
	(1) 調査の概要	9
	(2) 土坑	11
	(3) 溝	18
	(4) その他の遺構	23
	(5) その他の出土遺物	23
3	II 区の調査	25
	(1) 調査の概要	25
	(2) 土坑	26
	(3) 溝	26
	(4) その他の遺構	27
IV	まとめ	28

図版目次

図版 1	1 調査区周辺地形 (西から)	2 調査区周辺地形 (東から)	
	3 調査区周辺地形 (北から)		
図版 2	1 調査区近景 (北から)	2 調査区近景 (南から)	3 調査区近景 (南東から)
図版 3	1 I・II 区全景 (上が南)	2 I 区全景 (上が南)	3 II 区全景 (上が南)
図版 4	1 1号土坑 (南から)	2 2号土坑 (南から)	3 2号土坑土層 (北東から)
図版 5	1 3号土坑 (北西から)	2 4号土坑 (南から)	3 5号土坑 (西から)
図版 6	1 6号土坑 (北西から)	2 7号土坑 (北から)	3 8号土坑 (南から)
図版 7	1 9号土坑 (東から)	2 10号土坑 (東から)	3 11号土坑 (西から)
図版 8	1 12号土坑 (北西から)	2 14号土坑 (東から)	3 15号土坑 (北から)

- 図版9 1 16・17号土坑（北から） 2 1号円形周溝状遺構（北から）
 3 2号円形周溝状遺構（北から）
 図版10 2号土坑出土土器、1号溝出土土器その①
 図版11 1号溝出土土器その②
 図版12 1号溝出土土器その③、I区包含層等出土土器、I区出土土製品・石製品

挿図目次

第1図	調査区位置図（1/2,000）	1
第2図	彼岸原遺跡の位置	4
第3図	彼岸原丘陵における遺跡分布図（1/20,000）	5
第4図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	6
第5図	調査区全体図（1/300）	8
第6図	I区遺構配置図（1/200）	10
第7図	1・3～9号土坑実測図（1/40）	12
第8図	1号土坑出土土器実測図（1/4）	13
第9図	2号土坑実測図（1/40）	14
第10図	2号土坑出土土器実測図（19は1/3、他は1/4）	15
第11図	10～15号土坑実測図（1/40）	17
第12図	1号溝土層・遺物出土状況（1/60）	18
第13図	1号溝出土土器実測図その①（1/4）	19
第14図	1号溝出土土器実測図その②・5号溝出土土器実測図（1/4）	20
第15図	3～6号溝土層図（1/40）、1号円形周溝状遺構実測図（1/60）	22
第16図	ピット・包含層等出土土器実測図(1/4)、各遺構等出土土製品・石器実測図(1/2)	24
第17図	II区遺構配置図（1/200）	26
第18図	16・17号土坑実測図（1/40）、2号円形周溝状遺構実測図（1/60）	27

I はじめに

1 調査にいたる経緯

県営彼岸原団地は、昭和39年度～43年度の建設以来すでに40年以上が経過しており、老朽化した住宅の建替工事が平成17年度から行われてきた。建替工事は平成17年度の第1期工事より順次進められてきているが、彼岸原団地のある、通称彼岸原台地一体は、古くから弥生時代の遺跡が点在することで知られる学史上においても著名な地域であり、当該事業地もまた周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、福岡県教育委員会・穂波町教育委員会(～平成18年度)・飯塚市教育委員会(平成19年度～)では、工事の進捗に従って埋蔵文化財の確認調査・発掘調査を随時行ってきた。

団地の中央部を対象として最初に建替工事が計画された第1期工区においては、事前の確認調査により工事対象地のほぼ全面に遺構が広がることが明らかとなり、平成17年度～18年度にかけて2次にわたる発掘調査が行われた。この結果、竪穴住居跡7棟・掘立柱建物跡5棟などを中心とする弥生時代中期後半の集落跡が検出され、地元住民を主な対象として現地説明会が開催されるなど、大きな反響を呼んだ。

一方、団地東側を対象として工事が計画された第2期工区においては、事前の確認調査で遺構が確認されず、過去の削平によりすでに失われた可能性が高いことが明らかになったため、発掘調査は行われなかった。

平成21年度に工事の開始が予定されていた第3期工区は、第1期工区の西側に隣接しており、広い範囲が大きく削平されていたものの一部に削平を免れた箇所も残っていて、遺構が残



第1図 調査区位置図(1/2,000)

存している可能性があるものとみられた。そこで、県営住宅課は飯塚市教育委員会に確認調査を依頼し、平成21年6月25日にバックホーを用いた確認調査が行われた。その結果、対象工区の北西部に残存する削平を免れた高まりからその東側にかけて遺構の存在が確認された。

これを受けて県教育庁総務部文化財保護課と県建設都市部県営住宅課、飯塚市教育委員会文化課が発掘調査の実施について協議を行い、県文化財保護課が主管課である県営住宅課からの執行委任を受けて平成21年度に発掘調査を行うことで協議がまとまった。発掘調査は平成21年8月3日より開始し、同年9月30日まで行った。

2 調査の経過

発掘調査は8月3日より開始した。調査担当者は6月末より県道直方行橋線建設工事に先立つ延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ区の、また7月上旬より県道行事泉線改良工事に先立つ福富小畑遺跡の発掘調査に携わっており、福富小畑遺跡の発掘調査の終了とともに延永ヤヨミ園遺跡Ⅴ区の発掘調査を7月1日付で新規に採用された職員に引き継ぎ、彼岸原遺跡第3次調査に着手する形となった。

確認調査の結果、建設予定地の北西部に残された高まりに比較的良好に遺構が残り、その東側も大きな削平を受けているものの遺構が残存していることが確認されていた。そこで、工事の中で削平される予定の北西部の高まりと、西側隣接地のうち建物の基礎工事により掘削される予定の南側部分について発掘調査を行うこととし、それぞれⅠ区・Ⅱ区として調査を開始した（第4図）。

調査はまず重機を用いたⅠ区の表土剥ぎより開始した。遺構は地山とよく似た色で、土のしまりも区別が難しく、遺構面の検出にはやや難を伴ったが、溝状遺構に土器が多量に包含されている状況が確認でき、遺構面を決定することができた。

Ⅰ区の表土剥ぎがある程度進捗した8月10日より、作業員を投入して遺構の掘削を開始した。盆の前後は晴天が続いて厳しい暑さの中での作業が続いたが、8月20日過ぎより徐々に気



調査に参加いただいた方々

温も下がりはじめ、好天に恵まれて調査ははかどった。重機はⅠ区の表土剥ぎ終了後そのままⅡ区の表土剥ぎに入り、8月中旬にはⅡ区の表土剥ぎも終了したが、その後の好天続きでⅡ区の遺構面が乾いてしまい、その後の検出に苦勞することとなったのは反省すべき点であった。

Ⅰ区の遺構掘削にめどがついた9月上旬からⅡ区の検出に入ったが、遺構面が乾燥していきわめて堅く作業は難航した。散水車による水まきを行いブルーシートにより被覆して浸透させる作業を繰り返し、また降雨もあってようやく9月中旬にはⅡ区の遺構検出を終えることができた。Ⅱ区は攪乱により遺構面が広く破壊されており遺構は多くなく、9月25日には遺構掘削をおおよそ終了してラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、その後9月30日には図面作成を含むすべての現地作業を終了して機材の引き上げを行い、無事調査を終了する運びとなった。

3 調査の組織

発掘調査（平成21年度）および整理・報告書作成（平成24年度）の関係者は下記の通りである。平成23年度以降は組織改革により、県総務部文化財保護課の埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管されている。

総括	平成21年度		平成24年度
文化財保護課長	平川 昌弘	九州歴史資料館長	西谷 正
副課長	池邊 元明	副館長	篠田 隆行
参事兼課長技術補佐	小池 史哲		
	伊崎 俊秋		
課長補佐	前原 俊史		
庶務			
管理係長	富永 育夫	総務室長	圓城寺紀子
事務主査	藤木 豊	企画主査	長野 良博
主任主事（庶務担当）	近藤 一崇	事務主査	青木 三保
主任主事	野田 雅	主事	谷川 賢治
	仲野 洋輔	主任主事	近藤 一崇
調査・報告			
調査第一係長	吉村 靖徳	文化財調査室長	飛野 博文
技術主査	齊部 麻矢	文化財調査室長補佐	吉村 靖徳
	岸本 圭	文化財調査班長	小川 泰樹
主任技師		参事（整理担当）	小池 史哲
主任技師（調査担当）	小澤 佳憲	技術主査（調査担当）	小澤 佳憲

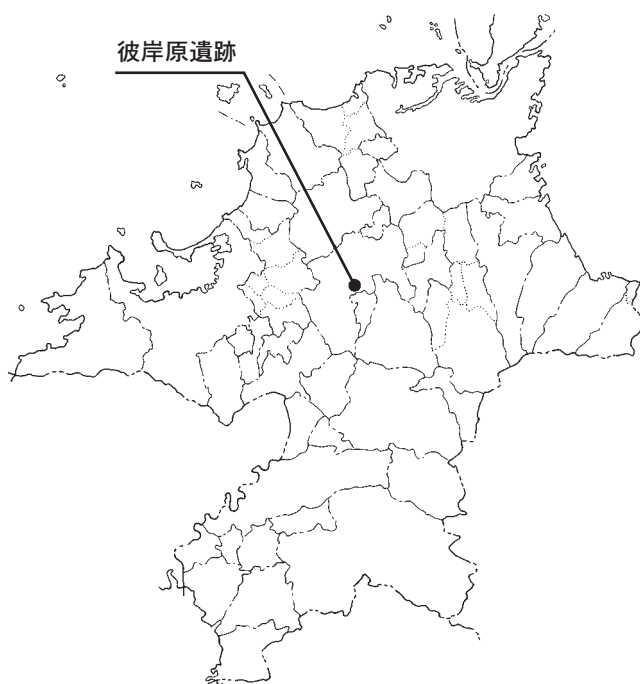
なお、発掘調査にあたっては、地元飯塚市より多くの方々が作業員として参加され、酷暑の中、熱心に作業にあたられた。また、発掘調査中には、飯塚市教育委員会教育課・筑豊教育事務所・飯塚土木事務所にさまざまにご協力いただいたほか、地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げます。

II 位置と環境

1 地理的環境

彼岸原遺跡は、福岡県飯塚市大字弁分613に所在する。

飯塚市は福岡県中央部やや北寄りに位置している。福岡県は律令期の旧国でいうところの筑前・筑後・豊前（一部）から構成されているが、飯塚市はそのうち筑前地域の東端部に位置しており、筑前と豊前の境界部周辺、いわゆる筑豊地域にある。直方・田川とともに俗に筑豊三都ともよばれるこの地域は、戦前から戦後にかけて石炭産業で名を知られ、現在でもあちこちに石炭関連産業遺跡が残ることで近年とみに有名になってきている、人口約13万人、面積にして約214km²の規模を持つ都市である。



第2図 彼岸原遺跡の位置

飯塚市とその周辺地域は、嘉穂盆地と呼ばれる小さな盆地地形を形成していて、地理的に小さなまとまりを形作っている。その中央部では現在も、久留米市など福岡県南部地域と北九州市など福岡県東部地域を結ぶ幹線国道200号線と、福岡市など福岡県西部地域と行橋市など福岡県東部地域とを結ぶ幹線国道201号線が十字型に交差する交通の要所であるが、古く弥生時代中期には立岩遺跡において多量の舶載鏡が博多湾沿岸地域からもたらされ、また筑紫君磐井の反乱を鎮圧したのち大和政権によって鎌・穂波の両屯倉が置かれ、あるいは古代には大宰府から米の山峠を経て豊前地方へと至る官道が通るなど、歴史的に見ても重要な交通の要衝であったことが知られる。

地形的に見てみよう。飯塚市は福岡県の中央部を北流して響灘に注ぐ大河、遠賀川の中流域にあたり、三郡山地から流れ出る穂波川・英彦山系から流れ出る嘉麻川などの遠賀川の主要な支流の多くが合流するところである。嘉麻川・穂波川の合流ポイントである現在の飯塚市街地のすぐ北の地点以南の山裾部にかけては、上述のように嘉穂盆地と呼ばれる小さな地形的まとまりを形作っている。嘉穂盆地は、西側を三郡山地、東側を関の山-船尾山-金国山と続く豊前との境界線にあたる山地、南側を英彦山系古処山-屏山-馬見山山地に囲まれた小さな盆地で、中央を遠賀川とその支流が北流している。

地質学的には、後期古生代の呼野層群・三郡変成岩、白亜紀の関門層群・花崗岩類が基盤層を形成していて平野中央部や周辺に点在する丘陵地帯と平野を囲む山地を形成しており、一方中央部の平野地帯には直方層群などの古第三紀層が露出して石炭を産出する元となるなど、きわめて複雑かつ入り乱れた地質を形成している。

彼岸原遺跡の立地する、通称「彼岸原丘陵」は、盆地の西側を画する三郡山地から派生した三郡変成岩を基盤とする低丘陵上に立地する。低丘陵群は平野内の各所で発達しており、学史上

著名な立岩丘陵も、平野東岸に発達した低丘陵の一つに数えられる。平野西岸の低丘陵群は三郡山地から流れ出る小河川によっていくつかのまとまりに分断されており、ここでは便宜的にそれらを南から「椿丘陵」・「彼岸原^{おぼさ}小正丘陵」・「明星寺丘陵」・「潤野丘陵」・「大日寺花瀬丘陵」に分けておきたい。遺跡はこのうち、彼岸原小正丘陵の一角に立地する。

2 歴史的環境

彼岸原遺跡は、彼岸原小正丘陵の南側の一角に立地する。彼岸原小正丘陵は標高約50～70m、低地との比高差は約20m程をはかる低丘陵である。この丘陵は、過去に「彼岸原丘陵」と呼ばれ、弥生時代中期の遺跡が多く分布することで知られてきた。以下、遺跡を取り巻く歴史的環境について、特に弥生時代に焦点を合てながら見ていきたい。

嘉穂盆地における弥生時代遺跡のほとんどは、平野に面して展開する低丘陵域を舞台として展開し、最初期の弥生時代の資料は現在のところ前期後半にまでしか遡り得ない。

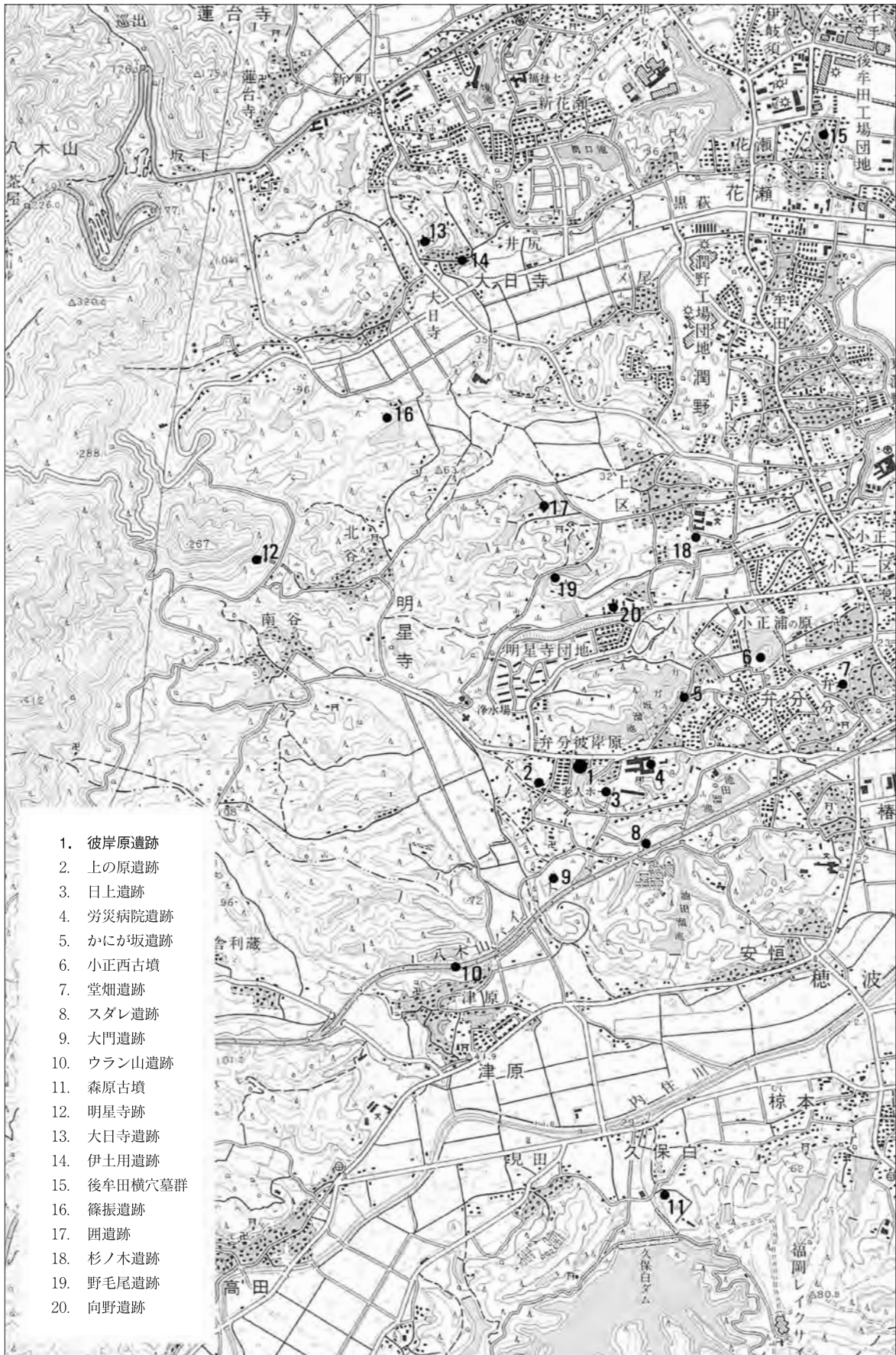
前期後半には、この地域において東菰田遺跡という学史上有名な遺跡が知られている。この遺跡から発掘された前期後半の土器群は、東菰田式土器と名付けられた。今でいう北部九州における板付Ⅱ式土器におおよそ相当する。遠賀川流域において同時期の遺跡がいくつか調査され、東菰田遺跡も含むそれらの遺跡から出土した弥生前期の土器が、通称「遠賀川式土器」と呼ばれることとなり、西日本全域における弥生時代前期土器の指標となったのである。

この地域において弥生時代文化が大きく花開いたのは、その直後にあたる前期末～中期初頭の時期であった。この時期になると、平野を取り巻く低丘陵域に一斉に弥生時代集落が進出するのである。彼岸原遺跡とは遠賀川を挟んで対岸の北西方向に約5kmに位置する著名な遺跡である立岩遺跡群ももちろん、この時期に大きく展開した遺跡群である。嘉穂盆地における弥生時代遺跡というと、すぐに立岩遺跡群のことを思い浮かべる人が圧倒的多数であろう。しかし、立岩遺跡群の他にも多くの弥生時代遺跡が、立岩遺跡群と同じ前期末～中期初頭に嘉穂盆地に進出するのである。

なかでも学史上有名な例として、彼岸原丘陵域の遺跡群があげられる。古くは森貞次郎により取り上げられたことで、またスダレ遺跡における人骨嵌入石剣切先の出土例もよく知られるところであろう。スダレ遺跡より先に発掘調査が行われた日上遺跡の報告書に拠れば、当時、彼岸原小正丘陵域の南側にあたるいわゆる彼岸原丘



第3図 彼岸原丘陵における遺跡分布図 (1/20,000)



第4図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

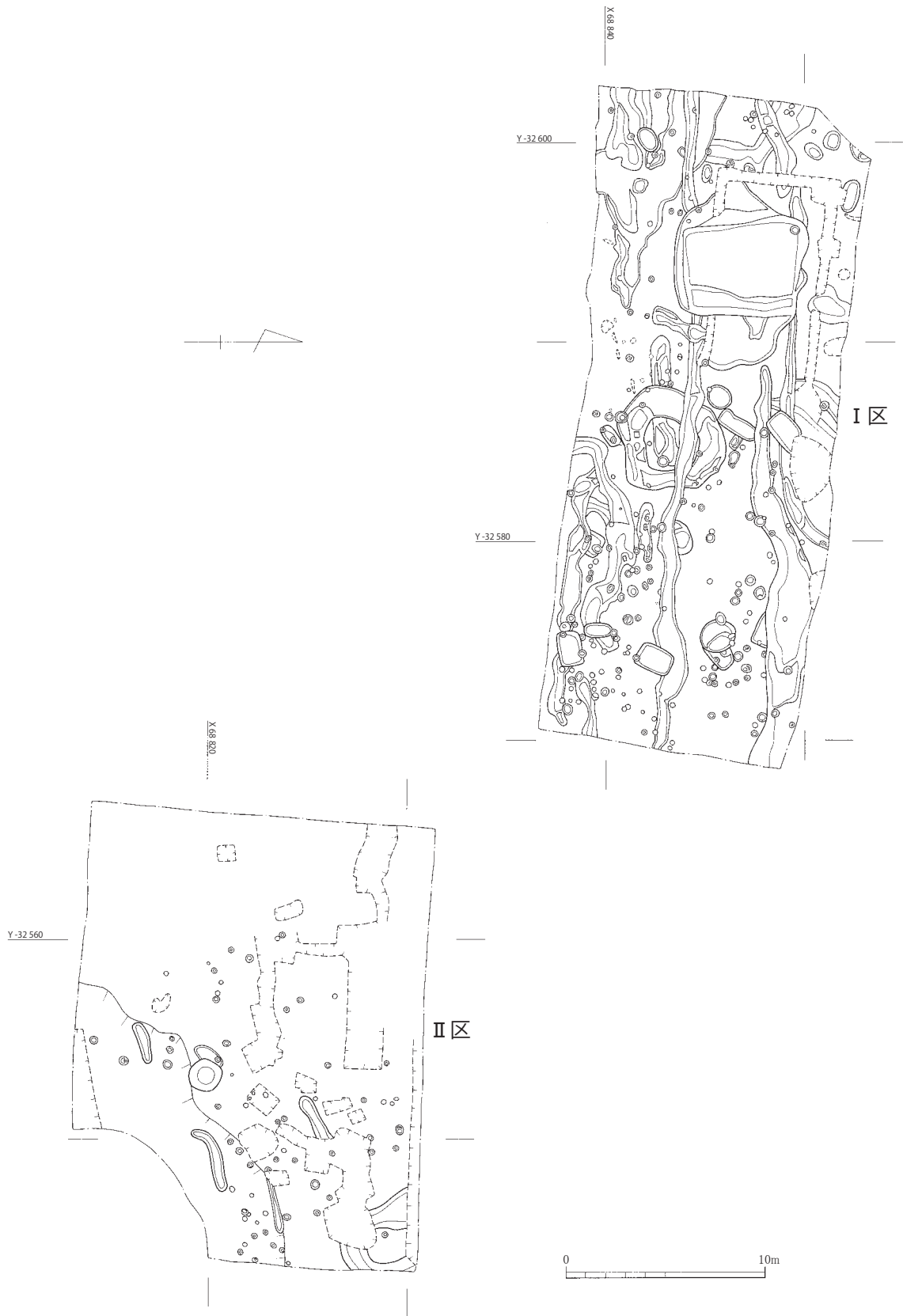
陵の弥生時代集落として堂畑遺跡(1)・かにかが坂遺跡(2)・労災病院遺跡(3)・公舎遺跡(4)・日上遺跡(5)・弥生(袋状竪穴)遺跡(6)・上ノ原遺跡(7)・天神森遺跡(8)・椿神社西方遺跡(9)・弥生(甕棺)遺跡(10)・穂波西中学校遺跡(11)・油田遺跡(12)・弥生(包含層)遺跡(13)・大門遺跡(14)などが知られていたという(第3図)。図を見ると、これらの大半が穂波川の支流内住川の北に八つ手状に広がるいわゆる彼岸原丘陵域にあって、丘陵の小さな尾根状支脈ごとに小さな遺跡を形成していたことがわかる。

このような状況はおそらくその北に展開する同じ低丘陵である大日寺花瀬丘陵、潤野丘陵、明星寺丘陵などでも存在したのであろう。最近までに明星寺丘陵では野毛尾遺跡、潤野丘陵では長畑遺跡・赤坂遺跡・郷ノ原遺跡・嶋廻遺跡など、大日寺花瀬丘陵でも大日寺遺跡など、弥生時代前期後半～中期の遺跡が知られるようになってきた。この地域は石炭産業やその後の宅地造成による開発が埋蔵文化財の周知化に先行して行われたため、知られることのないままに葬り去られた遺跡も少なくないであろうから、たまたま早くより遺跡の密集が知られていた彼岸原丘陵のように、他の丘陵域においても弥生時代前半期の集落遺跡が点在していた可能性は十分に考えられるところである。

興味深いのは、これらの遺跡のほとんどが、前期後半でも新しい時期から前期末にかけて丘陵上に進出し、中期の中葉まで継続して集落を営むものの、中期の後半にまでは継続せずに断絶してしまうことである。この前期～中期にかけての集落の動きは、小郡市の三国丘陵域におけるそれとまったく同一の動態であり、非常に興味深い。

では、中期後半～後期にかけての集落はいったいどこへ行ってしまうのだろうか。嘉穂盆地域における中期後半以降の集落遺跡(墓域を除く)としては、飯塚市高田の箱掛遺跡、嘉麻市才田のアナフ遺跡など、いずれも上流川の丘陵裾部や扇状地域において確認され、丘陵上ではなくその裾部の比較的平坦な土地に見られる傾向があるようである。先に触れた小郡市三国丘陵域では、丘陵の頂部に墓域のみ残しつつ、丘陵の裾部に広がる河岸段丘上に中期後半以降後期に至るまでの集落が多く営まれることがわかっており、おそらく人口増加による広大な可耕地の開発の開始に伴う動態ではないかと考えられている。彼岸原丘陵域などの弥生時代集落の動態も、同様の側面を持つものとすれば、丘陵の裾部に広がる河岸段丘域にこの時期の集落が広がる可能性はあろう。ただし、嘉穂盆地においては丘陵が河川に面して広がる堆積平野と直接接続するような地形が多く、河岸段丘の形成に恵まれていないという地形的特質があり、これがこの時期の集落がほとんど見られないことと関係する可能性もあろう。

さて、彼岸原遺跡は、このような集落動態の中で、数少ない中期後半の丘陵上の遺跡として希少な例である。彼岸原遺跡では、先だっで行われた第1次・2次調査で、中期後葉を主体とする時期の集落遺跡であることが確認され、この時期の円形竪穴住居跡7棟の他、掘立柱建物5棟、土坑、溝などが出土したことが報告された。今回報告する第3次調査地は、第2次調査地の西側約50mほどの場所に位置していて、地形的に第1・2次調査地と一連の丘陵尾根上にあることから、一連の集落遺跡が検出されると期待された。調査の結果、やはり中期後葉の溝や土坑を主体とし、出土遺物としては中期前葉まで遡るような遺物も出土した。遺構のほとんどが非常に浅く、削平が著しかったと考えられ、おそらく相対的に浅い遺構の大半は失われてしまったものと考えられる。遺跡の内容については報告を参照願いたい。



第5図 調査区全体図 (1/300)

Ⅲ 調査の報告

1 はじめに

今次調査における調査区は、Ⅰ区・Ⅱ区の2箇所を設定した。Ⅰ区が北西側、Ⅱ区が南東側に位置する(第1・5図)。

建替工事の対象地にはもともと、東西方向に長く伸びる長屋状の住宅が南北に何列も並んで建てられていた。この住宅を撤去した後に行われた試掘調査で把握できた旧地形によると、対象地の北側を東西に貫く市道に沿って丘陵の主尾根が東西方向に伸びており、調査対象地はちょうどその主尾根から支脈が南に伸びる部分の付け根の位置にあたるというものであった。ただし、対象地はほぼ全域にわたって住宅造成の際に大きく削平されていて、特に丘陵の頂部付近にあたる対象地北側と同じく支脈の頂部付近にあたる対象地西側が大きく削平されている状態であった。逆に対象地の南東側は急な斜面となって下っていて、調査地端部は盛土による造成の痕跡が確認された。現状では平坦に見える対象地も、もともとは大きな起伏があつて、削平や盛土によって現状の平坦な土地が造成されたということが把握された。

従つて、調査地における遺構の残りは基本的に極めて悪いことが予想され、また工事対象地の全体にわたって遺構が残っているとは考えられず、逆にごく一部にしか残されていない可能性の方が高いと考えられた。このような状況を受けて、表土剥ぎは基本的に試掘調査によって遺構が確認された箇所にとどめることとし、遺構の存在を確認しながら表土剥ぎを行つて、遺構がなくなった時点で調査範囲を限定することとした。

Ⅰ区は、工事対象地の北西側、丘陵の支脈が主尾根に取り付く部分の最も高いところに近い場所に設定した。ここはもともと宅地造成に伴う削平の際に周囲よりも一段高く造成されていた箇所で、試掘調査により遺構が確認されていた箇所である。遺構面は南側の土地の現地表面より高い位置にあり、Ⅰ区の南側には遺構が残されていないと判断したためここは調査していない。一方、東側は遺構が存在する可能性が高いと考えられたが、この部分は工事計画において駐車場として整備されることが決まっており、調査対象から除外した。

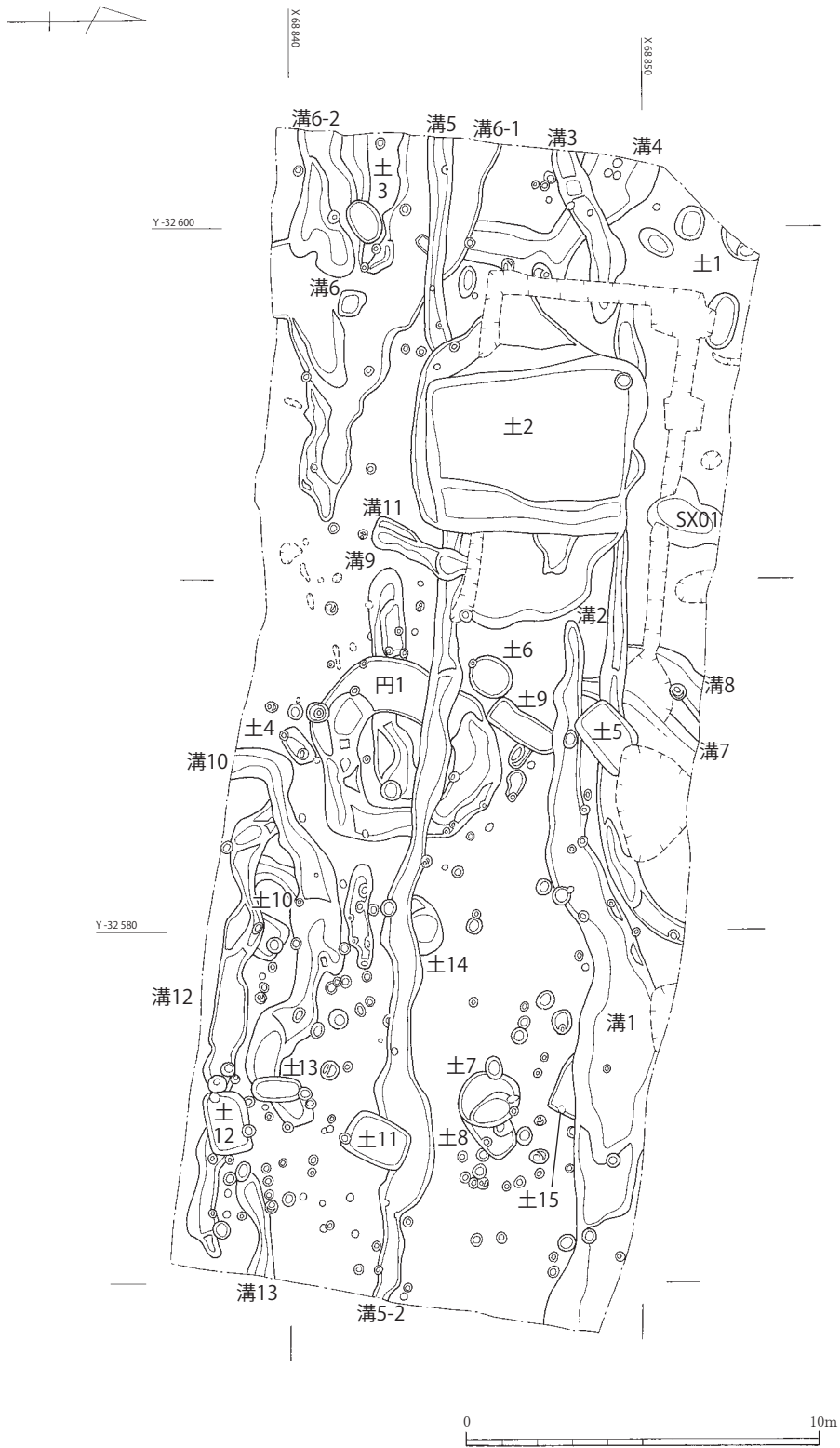
Ⅱ区は、この調査対象から除外した部分の南側である。試掘調査により、わずかながら遺構が存在することが明らかとなったため、遺構の残りが比較的よいと考えられる東側から表土剥ぎをしていった結果、途中で遺構がなくなったと判断された。このため、その場所で表土剥ぎを終了して調査区の範囲を確定した。また、表土剥ぎの際にⅡ区の南東隅部で丘陵の頂部から斜面に至る地形変換部を発見したが、これは北東から南西に向かって伸びており、このままこのラインが伸びてⅡ区の南側のほとんどの部分が斜面部に位置する可能性が高いと判断するに至ったため、Ⅱ区の南側も調査を取りやめた。以上の結果、調査対象地は工事対象地のうちの約1/3ほどに限定されることとなった。

以下、Ⅰ区・Ⅱ区の順番に調査成果について述べていくこととする。

2 Ⅰ区の調査

(1) 調査の概要(第5図、図版3)

Ⅰ区は、比較的削平が大きくなく、遺構の残存状況がよかつた調査区である。広さは南北が



第6図 I区遺構配置図 (1/200)

約12m、東西が約33mをはかり、東西に細長い長形状を呈する（第6図）。表土は暗茶～茶褐色を呈し、地山は白黄～明黄褐色粘砂質土で花崗岩の風化した粘性の高いマサ土である。

遺構は、この地山の中に掘り込まれており、地山よりやや色調が暗いため判別が可能であったが、非常に地山と近い色調をしていて遺構の範囲を決めるには困難を伴った。また、遺構同士が切り合っていた場合の先後関係の決定も難しいものがあった。

調査した遺構は、性格不明の土坑が15基、溝が13条、円形周溝が1基である。土坑は、形態も深さもさまざま、特に2号土坑は4×6mの規模を持ち深さも1m以上ある大規模なもので、類例が他になく性格は判明しなかった。溝はたいていが東西方向に延びるもので、特に1号溝はおそらく2次調査地から続くもの、5号溝は調査区を東西に貫くもので注目される。各遺構からの出土土器は総じて少なく、遺構の所属時期を推定するにはやや難を伴うものがほとんどであるが、包含層や表土中などから出土した土器も含み遺跡から出土した遺物のほぼ全てが弥生時代中期のものであり、遺構は全てこの時期のものと考えて大過ないものと思われる。以下、個別の遺構について説明していく。

（2）土坑

1号土坑（第7図、図版4）

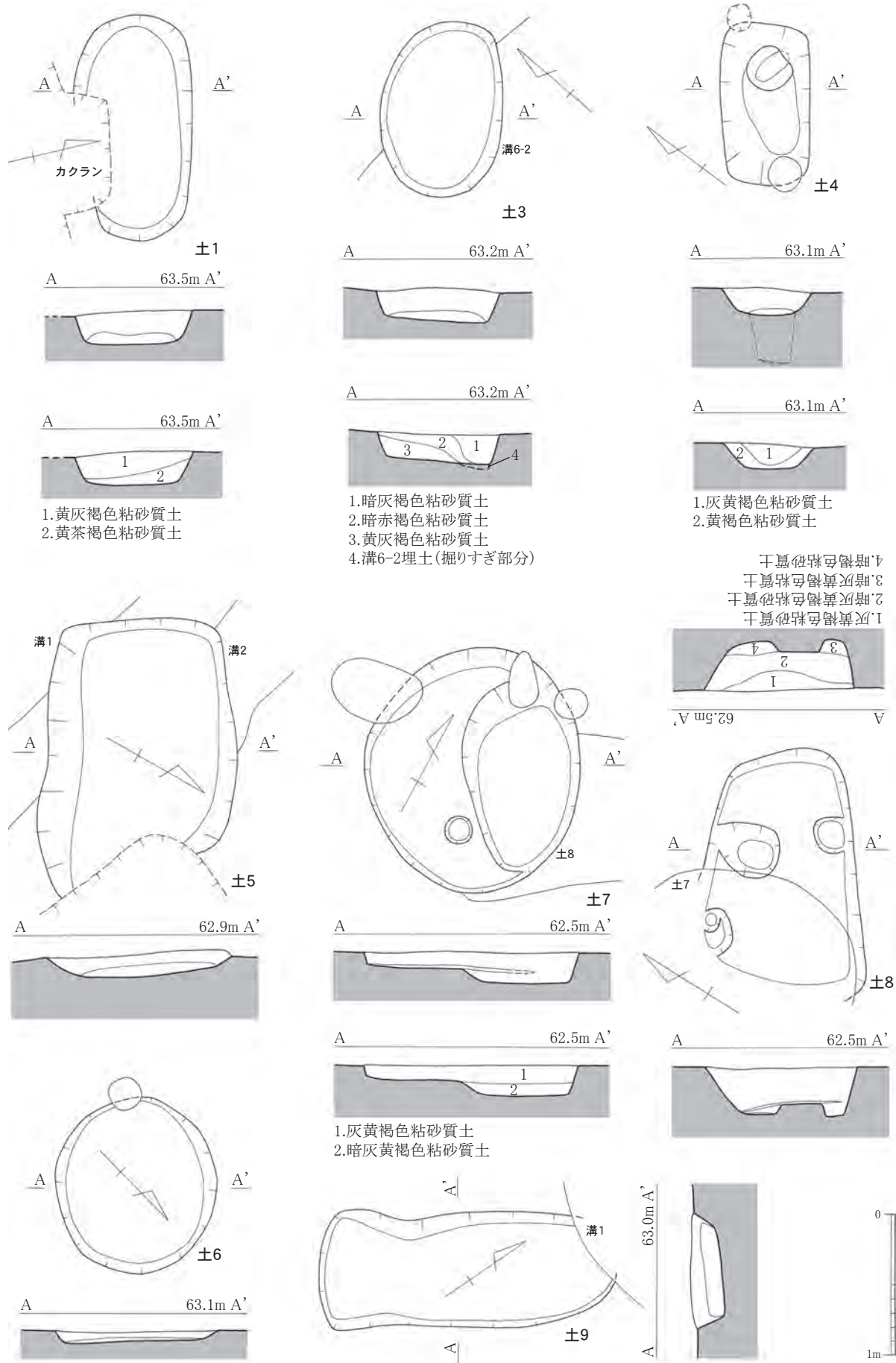
I区北西部で検出された遺構である。平面形は長蛇円形を示し、長辺1.6m、短辺0.8mの規模をもつ小型の土坑である。深さは約20cmほどが残っていた。南壁が攪乱によって大きく破壊されていたが他は比較的良好に残っていた。壁はやや斜めに立ち上がり、底は比較的平坦である。弥生土器の破片が数点出土しており、うち高坏1点が図示できた。出土遺物の時期から、弥生時代中期後葉に位置づけることができよう。

出土土器（第8図）

弥生土器（1） 1は高坏の坏部である。浅い半球状の坏部形態を示し、口縁部はいわゆる鋤先口縁でおそらく端部がやや垂れ下がるものであろう。口縁端部が破損していて口径（外端部径）は不明であるが、内径は約20cmをはかる。器壁調整は摩耗していて不明だが、内外が赤色に塗られていた痕跡が残り、おそらくミガキが施されていたのではないかと推定される。中期後葉須玖Ⅱ式のおそらく新段階に位置づけられる資料であろう。

2号土坑（第9図、図版4）

I区西側で検出された遺構である。平面形は南北にやや長い長方形で、規模は約4.5m×6mをはかり極めて大規模な土坑である。残存深さは約90cmと深いがおそらく削平により上部が失われていて本来はさらに深い遺構だったであろう。壁は垂直に近くやや斜め上方に立ち上がり、底部は平坦で東側の幅1m弱ほどが一段（10cmほど）低く掘り込まれている。内部の堆積土は上層が黒色土、下層は地山に似た白黄～黄褐色の粘砂質土で埋没していた。このような規模の土坑を他に知らず、用途は不明である。なお、東西に細長く掘り込まれたような溝状遺構が接続しているように見えるが、この部分は土坑の上層に堆積した黒色土と同じ土が広がっていて、この黒色土の上位には土坑の掘り方ラインが確認できないことから、おそらく削平後に土坑埋土が若干陥没して、これに引きずられるようにこの溝状部分が凹んだものと判断した。従って、本来土坑に伴うような遺構ではない。出土土器はいずれも小片で、また出土位置もバラバラであり、この土坑に意図的に廃棄されたようなものではない。大半は中～下層より出土



第7図 1・3～9号土坑実測図 (1/40)

し、この遺構の埋没した時期を示すが、第9図19の須恵器坏のみ上層の黒色土から出土している。遺物の時期から弥生時代中期後葉に位置づけられよう。

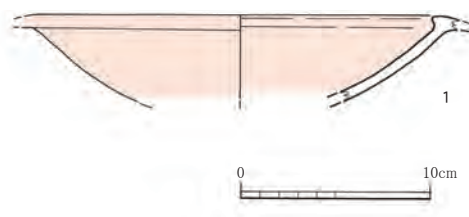
出土土器（第10図、図版10）

弥生土器（1～18） 1・2は甕の口縁部片である。いずれも「く」の字に屈曲して口縁端部上面をわずかに上方に引き上げる、いわゆる「跳ね上げ系」口縁タイプである。ともに小片で径は不明。3～11は甕形土器の底部である。3・4は底部の厚さがしっかりとあって、わずかな上げ底で、内面に底胴部境の段が見られないものである。10もほぼ同様の器形であるが、胴部最下位にくびれが見られずやや器形が異なる。いずれも比較的古い時期-中期前半の新しい段階から中期中葉前後-に位置づけられるものである。5・6・8は底部が比較的薄くなり、わずかに底胴部境の段が見られるが、底部径がまだ小さいものである。8は中でも底部の薄さが特徴的で型的にはやや新しく位置づけられよう。7・9は底部径が大きくなって底胴部境の段が明瞭になるもので、型的には新しいものである。11も同様であるが胴部最下位の段が見られない点で10と器形が共通する。12は蓋の頂部片である。甕の底部とおおよそ同じ器形をしているが頂部から胴部に移る部分の器形の開きが大きく区別できる。厚みがまだあり、内面の頂胴部境の段が見られないことから、やや古く位置づけられるものであろうか。13は長頸壺の口縁部であろう。わずかに斜め外側に直線的に延びる器形を持ち、口縁端部より少し下に三角突帯を一周させる。小片であって口縁部径を復元できなかったが、無理に測るとすれば約10cmほどになるだろうか。須玖式土器のいわゆる以東系に特徴的な器種である。14も以東系に特徴的な器種で、長胴の無頸壺であろう。口縁部付近のみが残る。口縁端部をわずかに肥厚させる器形が特徴的である。口縁部径約18.0cmを測る。15は広口壺の口縁部片として図示したが、小片であり、高坏の口縁部片である可能性も残る。いわゆる鋤先状口縁で口縁部は水平にやや長く延びる。口縁部上面の平坦面にいわゆる浮文をつけるが、通常の貼付浮文ではなく、作り出し浮文の可能性があり、非常に特徴的である。浮文の形は円形であるが、サイズが非常に小さい点も特徴的である。口径は28.6cmを測る。16は器台である。器壁が薄いわゆる精製器台である。口径9.8cm、底径10.7cmで底径がわずかに大きい上半部と下半部の形態がほとんど変わらない。内面・外面ともにハケメ調整により非常に平滑に仕上げている。17は粗製器台である。16とは異なり器壁が非常に厚く、内・外面に指頭圧痕がよく残る。18は高坏の脚部上半である。精製の高坏で、外面には縦方向のミガキ痕がびっしりと残されていて赤色顔料も部分的に残り、丹塗り磨研土器である。これらはおおよそ須玖Ⅱ式の範疇に収まり、その中で古新が見られる。

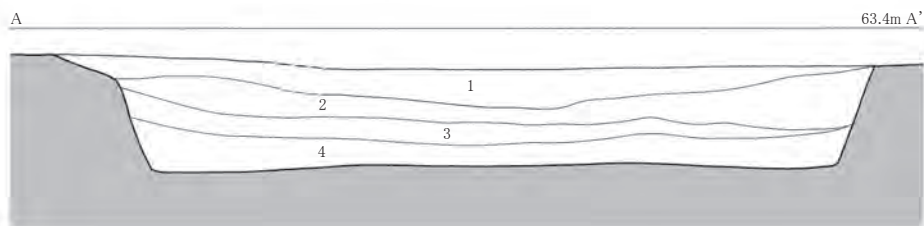
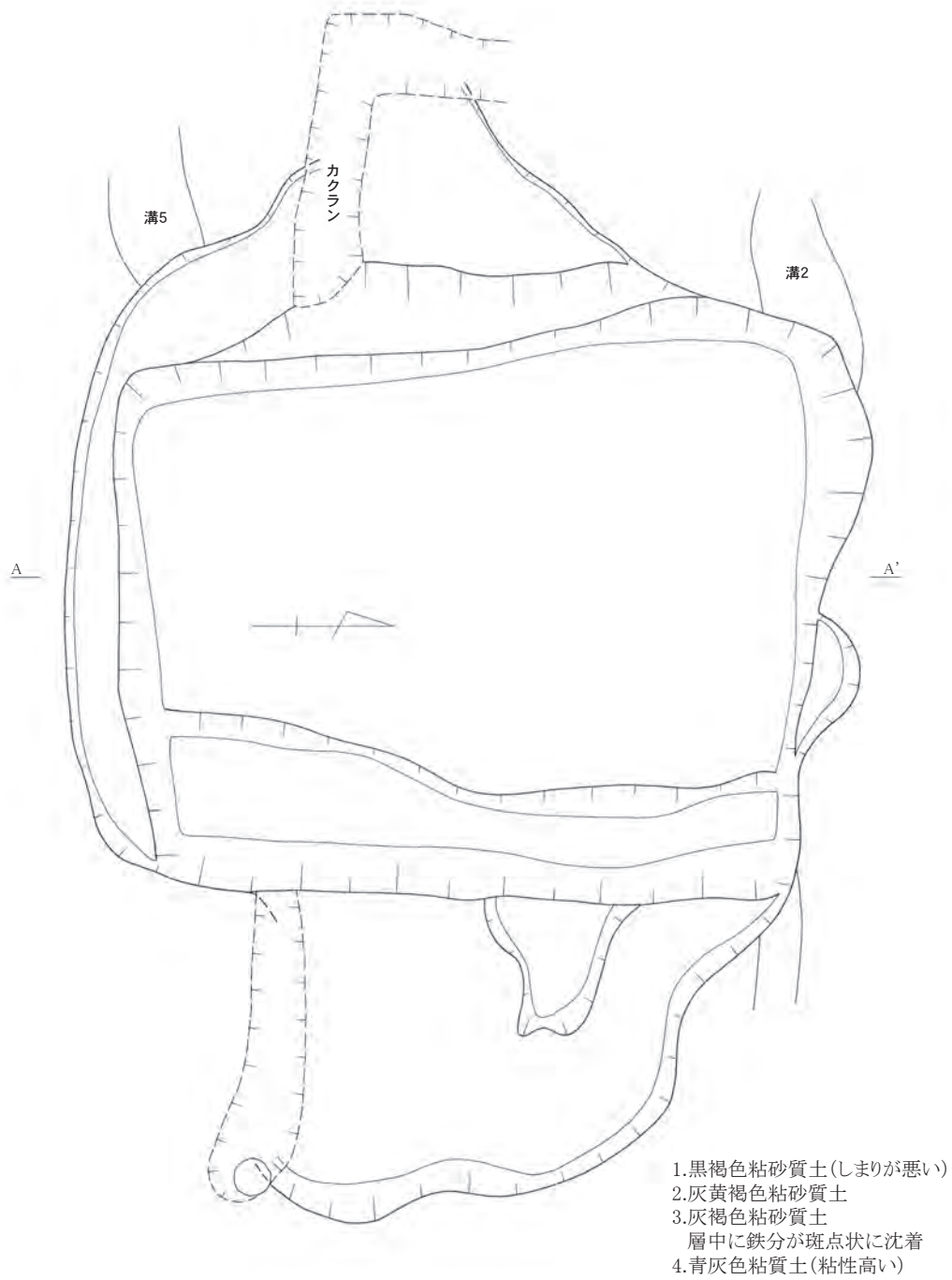
須恵器（19） 19は赤焼けの須恵器と判断した。器種は坏で、底部片である。底部は平坦で胴底部境に工具による沈線状の痕跡が残る。高台の付いたような痕跡は見られない。7世紀代のものか。

3号土坑（第7図、図版5）

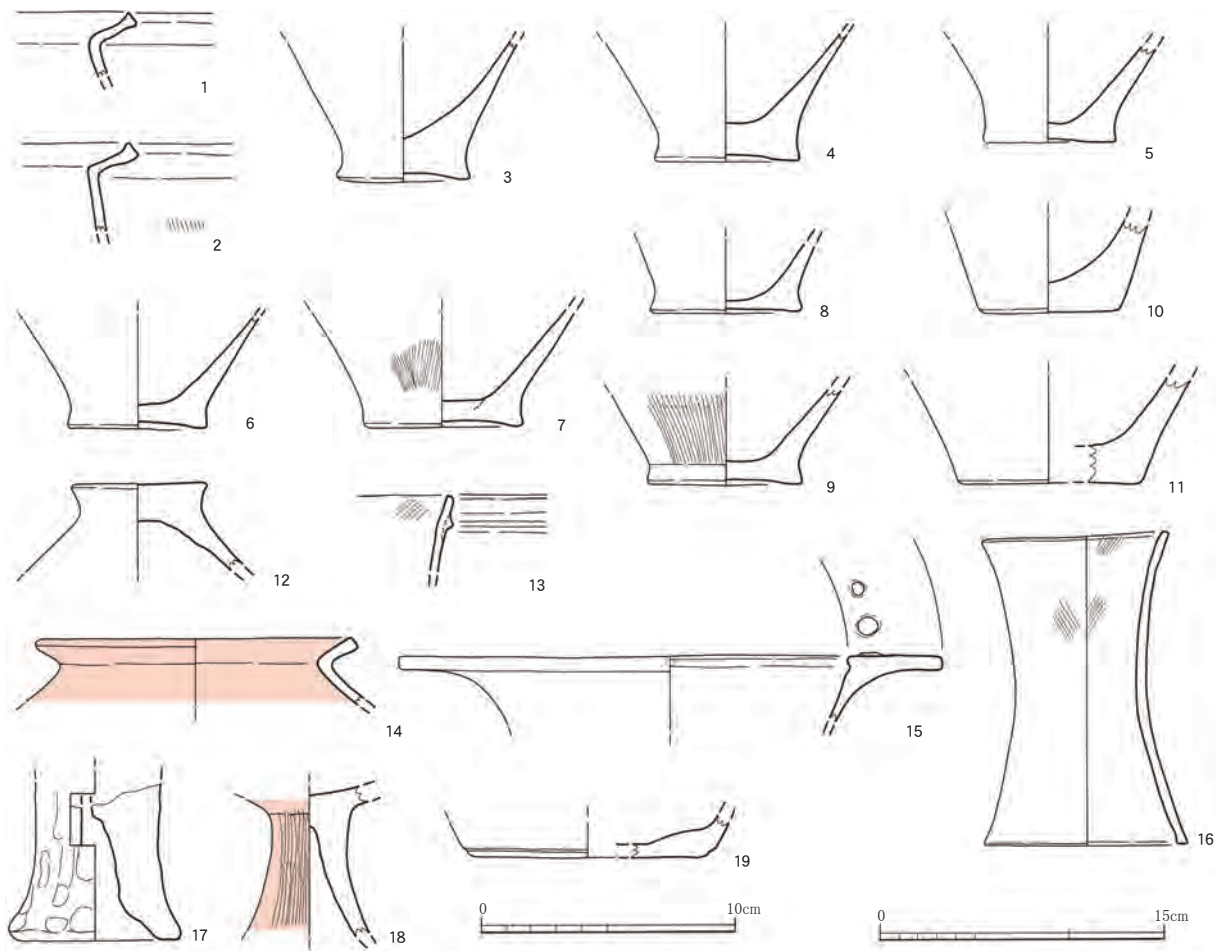
調査区の南西端部に検出された土坑である。平面形態は東西がやや長い卵形で、長径1.4m



第8図 1号土坑出土土器実測図（1/4）



第9図 2号土坑実測図 (1/40)



第10図 2号土坑出土土器実測図 (19は1/3、他は1/4)

弱、短径0.8m強を測る。深さは約20cmと極めて浅く、壁は斜めに立ち上がり底面はほぼ平坦である。6号溝をこわして作られており、これに後出する。出土土器はなく時期は不明。

4号土坑 (第7図、図版5)

調査区の中央部南端で検出された小型の土坑で、幅約0.6m、長さ1.2mの規模をもつ。平面形態は検出面では隅丸長方形を測るが壁は斜めに不定形に立ち上がっており底部は不定長楕円形を示す。底部東側にピットが掘り込まれているが土坑に伴うものか不明である。出土土器はなく時期は不明。

5号土坑 (第7図、図版5)

調査区の中央部北端で検出されたやや大きな土坑で、溝2をこわして作られていてこれに後出する。幅1.4m、長さ約2.2m (推定) の規模をもつ隅丸長方形の形態を持つ。すり鉢状に深くになっているが削平によりほとんど残っておらず深さは深いところでも10cm前後である。埋土は暗褐色粘砂質土であるが分層できなかった。出土土器はなく時期は不明。

6号土坑 (第7図、図版6)

調査区のほぼ中央部で検出された、直径約1.2mのほぼ円形の土坑である。深さは極めて浅く10cmも残されていない。南西部を一部小さなピットにより破壊されている。出土土器はなく時期は不明。

7号土坑（第7図、図版6）

調査区の東側で8号土坑と切り合いながら検出された土坑である。8号土坑をこわして作られており本土坑が後出する。平面形態は略円形で直径は1.8mほどを測る。東側が一部掘り下げられているが、これは下層の8号土坑の埋土を本土坑の続きと誤認して掘り下げてしまったもので、本来は底面が平坦であったものであろう。出土土器はなく時期は不明。

8号土坑（第7図、図版6）

調査区の東側で8号土坑に切られる形で検出された土坑である。平面形態は縦に長い台形で中央部の幅約1.0m、残存長さ1.6mほどを測る。出土土器はなく時期は不明。

9号土坑（第7図、図版7）

調査区のほぼ中央部で、6号土坑と隣り合う形で検出された土坑である。やや不整形の隅丸長方形を呈し、長さが約2.2m、幅0.8mほどの規模をもつ。北端部が一部1号溝に破壊されて失われている。深さは約20cmほどしか残っていない。出土土器は弥生土器とみられる小片が数点出土したが、図示できるものはない。

10号土坑（第11図、図版7）

調査区東側の南端部で検出された土坑である。12号溝により大きく破壊されていて半分以上が失われているが、おそらく隅丸長方形を呈していたものか。幅のみ判明し約1.2mほどを測る。底面はやや凹凸があるように掘ったが、実際は平坦に近かったと思われる。出土土器は弥生土器とみられる小片が数点出土したが図示できるものはない。

11号土坑（第11図、図版7）

調査区の東端部で検出した平面隅丸長方形の土坑である。5号溝を破壊していてこれより新しい。掘り方は比較的規格性が高いように見え、幅約1.2m、長さ1.8mを測る。出土土器は弥生土器とみられる小片が数点出土し、弥生土器の高坏の破片もあるが、図示に耐えない。

12号土坑（第11図、図版8）

調査区の東端部南側で検出した土坑である。12号溝を破壊しておりこれに後出する。平面形態は5・10・11号土坑などと同じく隅丸長方形で、約1.8m×約1.2mの規模も類似する。底面は平坦で壁はやや斜めに立ち上がる。削平が著しく深さは10cmも残っていない。出土土器はなく時期は不明。

13号土坑（第11図）

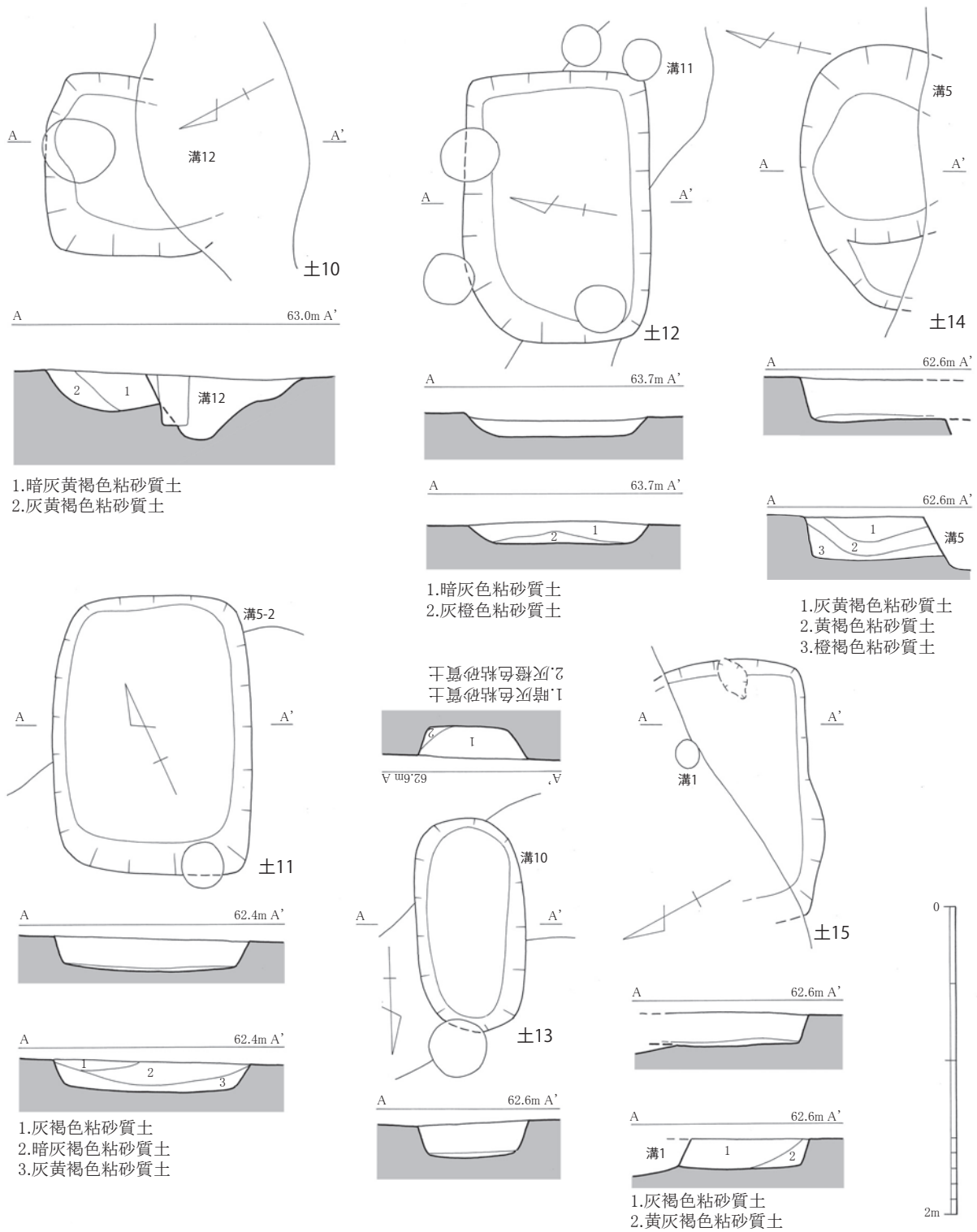
調査区の東端部南側、12号土坑の北側に隣接して検出された土坑である。平面形態は長楕円形で、幅約0.7m、長さ1.3mと比較的小型である。10号溝を破壊して作られておりこれに後出する。出土土器はなく時期は不明。

14号土坑（第11図、図版8）

調査区の中央やや東側よりに検出された土坑である。5号溝により大きく破壊されていて全形は不明であるが長楕円形を呈するか。東側が一段深く掘り下げられている。長さは約1.8m、幅はおそらく1.0mほどか。出土土器は弥生土器とみられる小片が数点出土したが、時期は不明。

15号土坑（第11図、図版8）

調査区東側北寄りで検出された土坑である。1号溝に半分ほどを破壊されていてこれより古く位置づけられる。平面形態は隅丸長方形で長さ約1.6m、幅約1.0mほどになるか。出土土器は



第11図 10~15号土坑実測図 (1/40)

なく、時期は不明。

(3) 溝

1号溝 (第6・12図、図版3)

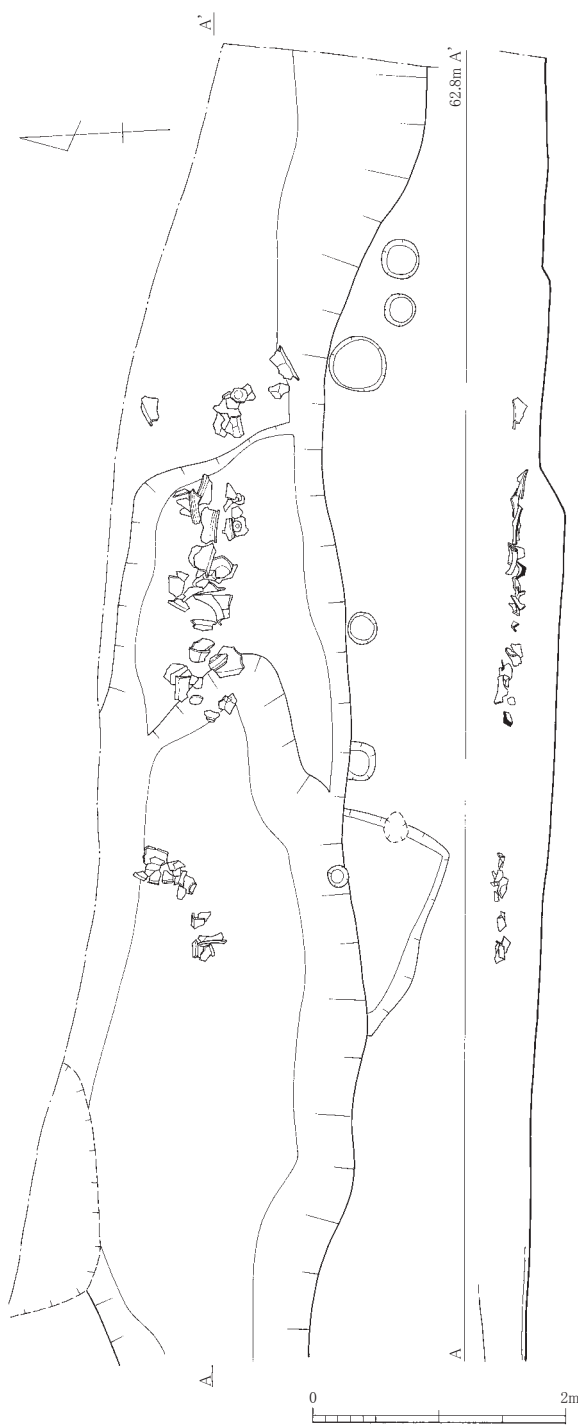
調査区中央やや西寄りから始まって東端まで延びる、調査区の北側を東西方向に走る溝である。最大幅約2m、断面形態はやや丸みをおびた台形とみられるが削平により極めて浅くしか残

っておらず詳細は不明である。底部から10cm以上浮いた状態で、溝の中央部から大量の土器が出土した。完形に復元できるものはなく、全て使用後廃棄されたものであろう。出土土器から、中期後半須玖Ⅱ式の新しい段階とみられる。なお、溝の延びる方向、断面形態、埋土、遺物の出土状況などが第2次調査3号溝と共通しており、おそらく第2次調査3号溝の延長部分にあたるものと考えられる。

出土土器（第12・13図、図版10～12）

弥生土器（1～33） 1～19は甕形土器の口縁部片である。いずれも口縁部が「く」の字の形態を呈するもので、須玖Ⅱ式の範疇に収まるものばかりである。頸部の突帯の有無と本数に着

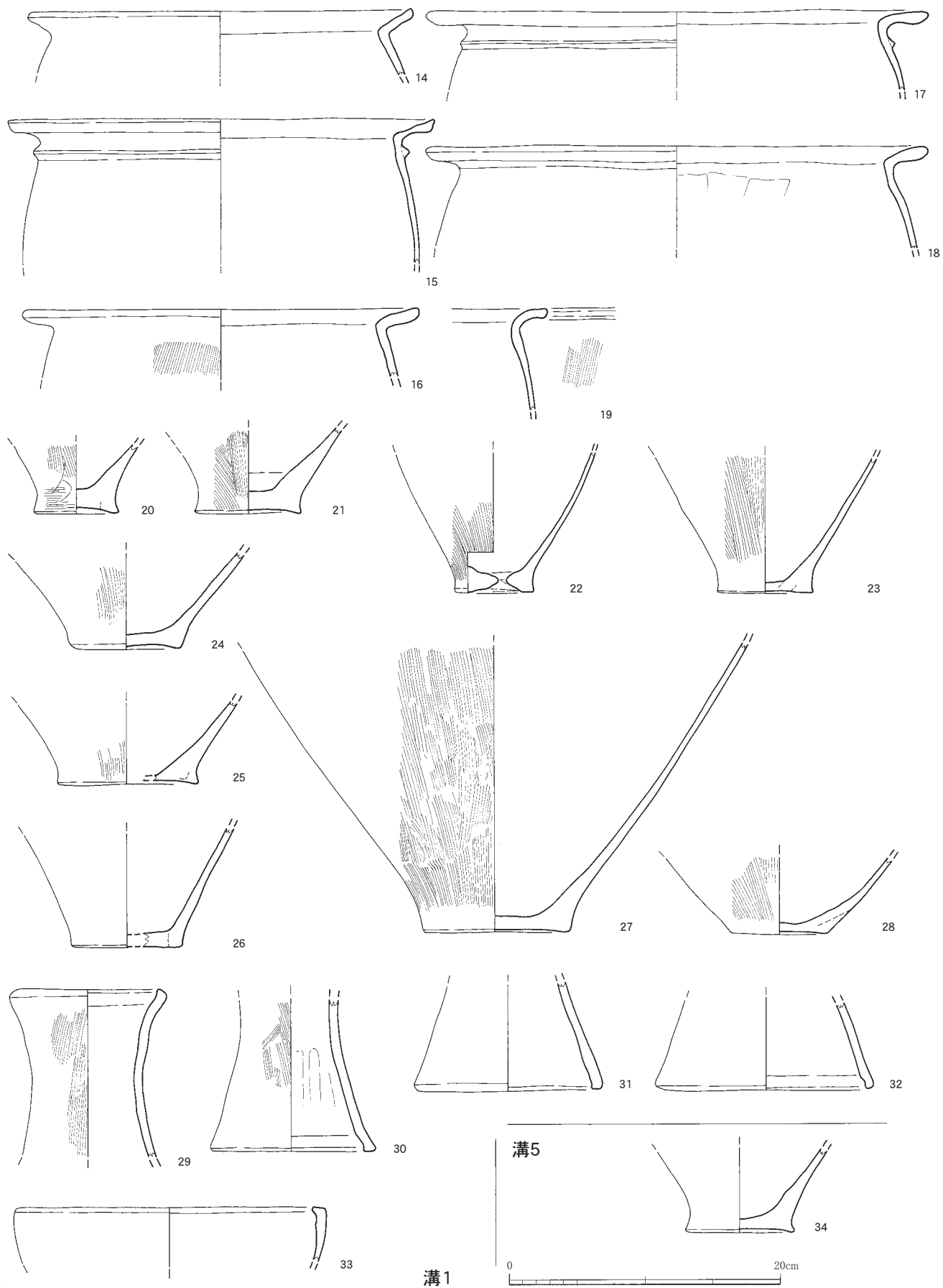
目すると、口縁部径が30cm以下の1～4・14・16と径37.0cmを測る18、口縁部径の不明な19が口縁部突帯を伴わず、口縁部径が30cm以上40cm以下の5～7・9・15・17と例外的に口縁部径が30cmよりやや小さい10が1条の突帯を持ち、口縁部径が40cmを超える大型の12・13と例外として口縁部径が37.6cmの11が2条の突帯をもっていて、おおよそ口縁部の大きさと頸部突帯の有無や本数が相関関係にあることがわかる。以下、口縁端部の形態に着目して詳細を述べていく。1～13は口縁端部上面を上方に短く引き上げ、下端を丸く収めることにより、いわゆる「跳ね上げ系」口縁と呼ばれるもので、この地域の在地的な形態要素であるためもっとも数が多い。次に、15は口縁端部上面を上方に引き上げる点では共通するが下面を上表面より短く収めることによって口縁部の断面を三角形状に仕上げるタイプで、跳ね上げ系口縁のバリエーションと考えられるタイプである。1点しか見られず在地のマイナーな変容か外来的な要素とみられる。残る14・16～19はいずれも口縁端部を丸く収めるもので、うち14・16・19は口縁端部を丸く収めようとしながらも上面がやや角張っていて、口縁部上面に強いナデを施すことによってわずかに凹ませるようにして、在地的要素である跳ね上げ系口縁の影響が強く表れていると考えられる一方、17・18は口縁部上面のナデが



第12図 1号溝遺物出土状況（1/60）



第13図 1号溝出土土器実測図その① (1/4)



第14図 1号溝出土土器実測図その②・5号溝出土土器実測図(1/4)

それほど強烈ではないため上面が丸く収められていて、断面形態が比較的丸に近くなっており、より外来系（おそらく筑前南部か）の要素が強く出ているものと考えられる。全ての甕が、器壁調整の手法が共通していて、胴部外面がハケメ、内面はナデ、口縁部は内・外面ともにナデ仕上げである。20～27は甕の胴～底部片である。これらは底胴部境を強くすぼませるものが大半を占めていていわゆる以東系の典型的な形態を示す。底部が厚いか薄いか、小さいか大きいのか、内面が底部と胴部が一連の傾斜・曲面で形成されているかまたは底部と胴部の境に明瞭な屈曲があって底部と胴部が別々の形状を呈しているかといった属性がおおよそ古いものか新しいものかという違いに対応していて、底部が厚くて小さく、内面が一連の形態をしている20や22などは古く、底部が薄くてやや大きく、内面が明瞭に屈曲している26・27などは新しく位置づけられる。20～22などは須玖Ⅰ式の新段階からⅡ式の最古段階に、26・27などはⅡ式の新段階に位置づけるものと理解してよいものと思われる。28は壺あるいは樽形甕の底部と考えられる。底部径が大きくて薄く、底部の上にくびれがみられないことから、須玖Ⅱ式の新段階に位置づけられる資料であろう。29～32は器台である。端部の形状、特に角度から、上半部か下半部かを判断して図示したが、これが正しいかどうかは不安が残るところである。サイズにはややばらつきがあり32の底部径が16.0cmで大きく、他のものは12～14cm程度である。器壁調整は、摩耗により判別できないものを除きいずれも内面縦方向のナデ、外面は縦方向のハケメで仕上げている。33は碗の口縁部か。あまりみない器形であるが半球形の胴部と平底をもつものか。口径は約22.6cmを測る。

2号溝（第5図、図版3）

調査区の北側と東西方向に延びて、中央やや東側で北側にゆるく曲がって調査区外へと消える溝である。削平により残存状況は悪く、西側は消失している。1号溝と並行して延びているようにも見える。2・5号土坑に切られ、7・8号溝を切る。出土土器はない。2号土坑より古く、弥生時代中期後半以前と考えられる。

3号溝（第5・15図、図版3）

調査区西端部にわずかに残る溝である。5mほどが東西方向に延び、2号土坑の西側で消滅している。残存状況は悪いが部分的に底が深い場所もみられ、比較的しっかりと掘り込まれた溝との印象を受ける。出土土器はなく時期は不明。

4号溝（第5・15図、図版3）

調査区の東端部を屈曲しながら南側に延びる溝である。3・6号溝に切られ、南側は6号溝により消滅している。掘り方は極めて浅く、溝というよりは浅い窪地といった方が適切かもしれない。出土土器はなく時期は不明。

5号溝（第5・15図、図版3）

調査区の中央わずかに南寄り、東西方向に直線的に貫く細めの溝である。平均的な幅は50cmほどだが、削平されていて本来はもっと大きな溝であったと思われる。6号溝・1号円形周溝・14号土坑を破壊しており、2・11号土坑・11号溝により破壊されている。溝の断面はV字状に近い逆台形で深さもしっかりとした溝である。出土土器は図示したもの他に数点の弥生土器の小片があり、弥生時代中期の遺構と考えられる。

出土土器 (第13図)

弥生土器 34は甕の底部である。底部の厚さはやや薄くなっているが上げ底で内面に段がなく、総体的に考えて古めに位置づけておきたい。須玖Ⅱ式の古い段階のものか。

6号溝 (第5・15図、図版3)

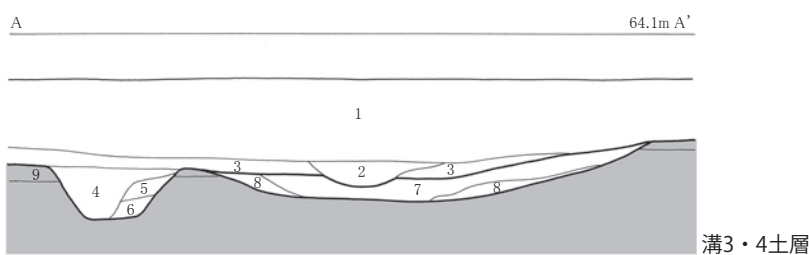
調査区の東側で検出した遺構である。2号土坑の南側から始まって西に延び、すぐに2条に分かれてともに調査区外へと広がる。4号溝を切り5号溝と3号土坑に切られる。出土土器はない。5号溝に切られており弥生時代中期のものか。

7・8号溝 (第5図、図版3)

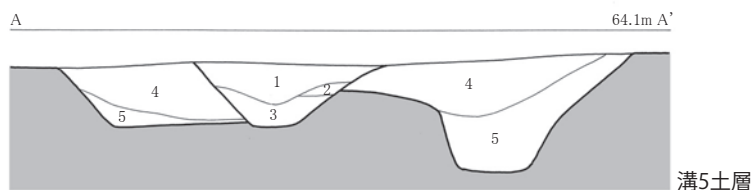
調査区の中央部北側調査区端部においてわずかに屈曲しながら調査区外へと延びる溝状遺構であり、7号溝と8号溝が同じように並行して延びているため、関連が深いものとして同じ項で報告した。2号溝と5号土坑により破壊されていてこれらよりも先行する遺構である。7号溝の埋土中から弥生土器とみられる小片が1点出土したが、図示に耐えるものではなく詳細は不明である。

9号溝 (第5図、図版3)

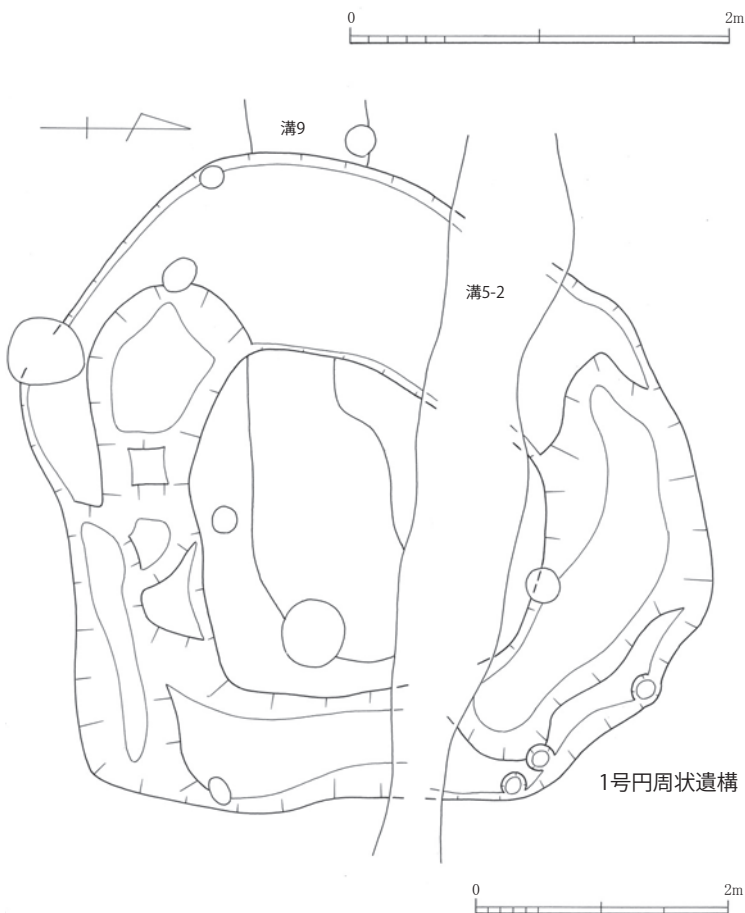
調査区の中央部東側で5・10号溝に挟まれて延びる溝である。1号円形周溝に切られる形で延びる溝もこの溝の延長方向にあり同一の溝と判断した。部分により深さが異なっていて底面レベルが安定しない特徴があ



- | | | |
|--------------------|-------------|--------|
| 1. 表土 | 7. 暗黄灰色粘砂質土 |) 溝4埋土 |
| 2. 暗褐色粘砂質土(攪乱) | 8. 黄茶灰色粘質土 | |
| 3. 黄灰褐色粘砂質土(土壌化部分) | 9. 明赤黄褐色粘質土 |) 溝3埋土 |
| 4. 暗褐色粘砂質土 | | |
| 5. 暗茶褐色粘砂質土 | | |
| 6. 暗赤褐色粘砂質土 | | |



- | | | |
|-------------|-------------|----------|
| 1. 灰黄褐色粘砂質土 | 4. 灰黄褐色粘砂質土 |) 溝6-1埋土 |
| 2. 灰茶褐色粘砂質土 | 5. 暗茶褐色粘砂質土 | |
| 3. 暗茶褐色粘砂質土 | |) 溝5-1埋土 |
| | | |



第15図 3～6号溝土層図 (1/40)、
1号円形周溝状遺構実測図 (1/60)

り、溝が断続的に延びるように見えるのはこのせいかもしれない。1号円形周溝に切られていてこれより古い遺構である。出土土器はなく、時期は不明である。

10号溝（第5図、図版3）

調査区の南東端部にあり、南側調査区外から北西側に延びて調査区内で消滅する。12号溝を切り13号土坑に切られる。出土土器はなく時期は不明。

11号溝（第5図、図版3）

2号土坑東側に南北方向に短く延びる小さな溝である。5号溝に破壊されていてこれに後出する。出土土器はない。5号溝に後出し、弥生時代中期以降の遺構である。

12号溝（第5図、図版3）

調査区の最南端の東側に10号溝と並行して延びる溝状遺構である。10号土坑を切り10号溝と12号土坑に破壊される。出土土器はなく時期は不明。

13号溝（第5図、図版3）

調査区の南東端部に東西方向に短く延びて調査区外へと消える溝状遺構である。出土土器はなく時期は不明。

（4）その他の遺構

1号円形周溝状遺構（第14図、図版3・9）

調査区のほぼ中心部で発見された遺構である。埋土が特に地山と似ていて検出には苦労した。9号溝を破壊し、5号溝により破壊されていて、出土土器に図示できるものはないが弥生土器の小片を少量出土していることからこの時期の遺構と考えられる。溝で囲まれた中に特筆するような遺構は検出されていない。出土遺物もなく、時期は不明。

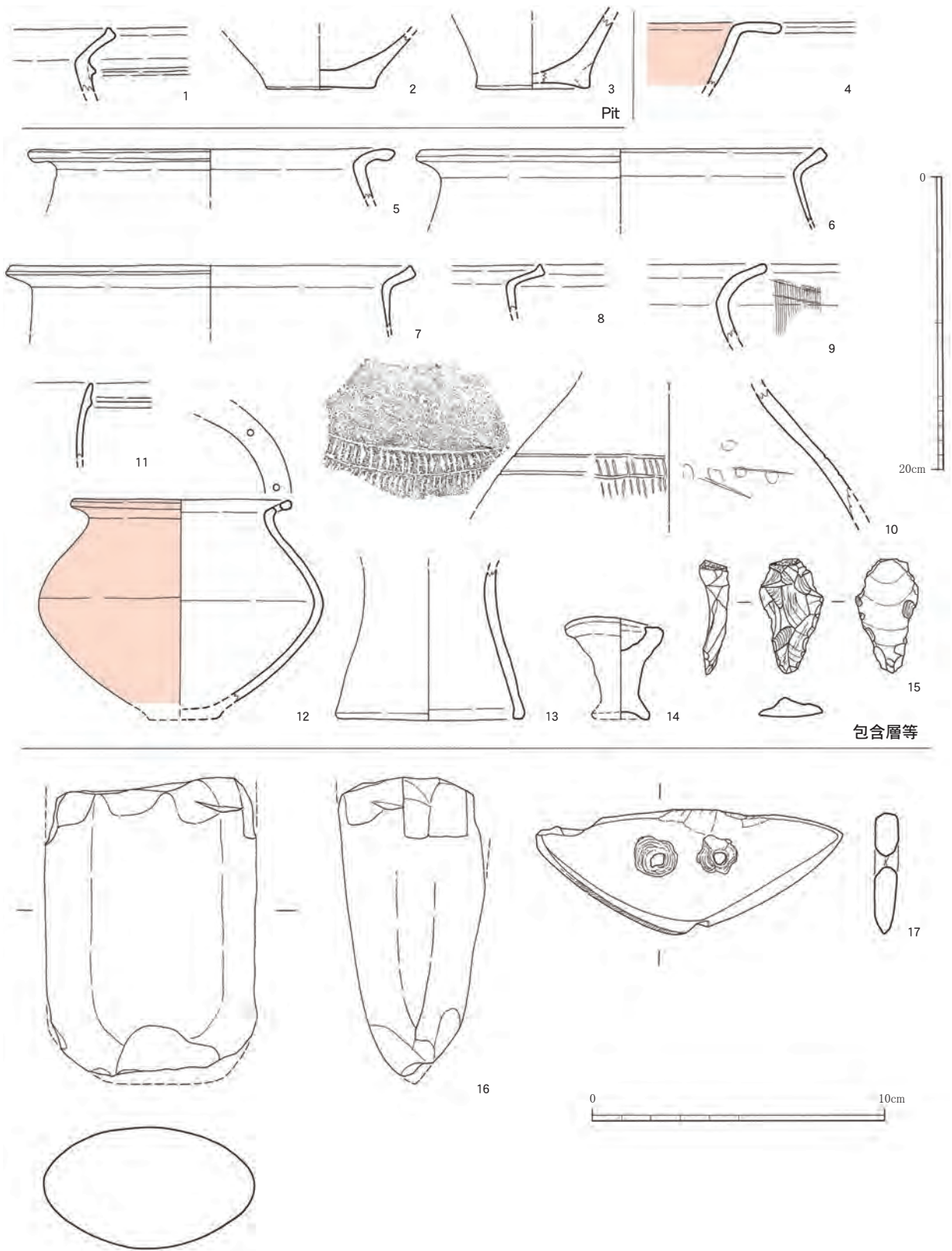
（5）その他の出土遺物

ピット出土遺物（第16図、図版12）

弥生土器（1～3） 1は弥生中期須玖式土器の甕の口縁部片。頸部に1条の三角突帯がめぐらされており、中型甕と思われるが、小片のため径は不明。いわゆる跳ね上げ系口縁の事例である。Pit5出土。2はおそらく壺形土器の底部片と思われる。細別器種は不明。底部径がやや小さく、内面が底部と胴部が一体化しており、須玖式土器でもやや古めの時期のものとみられる。Pit6出土。3は甕形土器の底部片である。底部はやや薄めになっているが上げ底で胴底部境が一体化していて須玖Ⅱ式でも古めに位置づけられる資料である。Pit22出土。

包含層等出土遺物（第16図、図版12）

弥生土器（4～13） 4は高坏の口縁部片である。鋤先口縁ではなく折り曲げ口縁であり比較的珍しい。口縁端部は丸く収める。内面に丹塗りの痕跡が認められ、器壁調整は不明だがおそらくミガキを施した精製器種であろう。5～8は甕の口縁部片である。いずれも口径が30cm以下で突帯を付さない。5は口縁端部を丸く収めるもの、6～8はいわゆる跳ね上げ系口縁である。9は壺の口縁部片か。板付Ⅱ式土器と思われる。10も板付Ⅱ式土器とみられる壺の胴部片。並行沈線の間には爪形の沈線を2列にわたって連続させる特徴的な文様構成をもつ。並行沈線は2条が認められるが本来は3条あった可能性があり、そうであれば上から沈線-爪形文の連続-沈線-爪形文の連続-沈線という文様構成になるだろうか。11は長頸壺の口縁部片である。やや開き気味に上方に伸びる口縁端部のみが残る。三角突帯を口縁端部やや下方につける。12は



第16図 ピット・包含層等出土土器実測図（1/4）、各遺構等出土土製品・石器実測図（1/2）

無頸壺である。ややつぶれた球胴と如意状に外反する口縁部を持ち、口縁部上面には2つで1対となる穿孔が施される。おそらく2対あったであろう。外面には丹塗り痕跡が認められ、精製器種である。13は器台である。形態から下半部の資料とした。14は手づくね土器で、高坏の模倣土器とみたが、よく分からない。

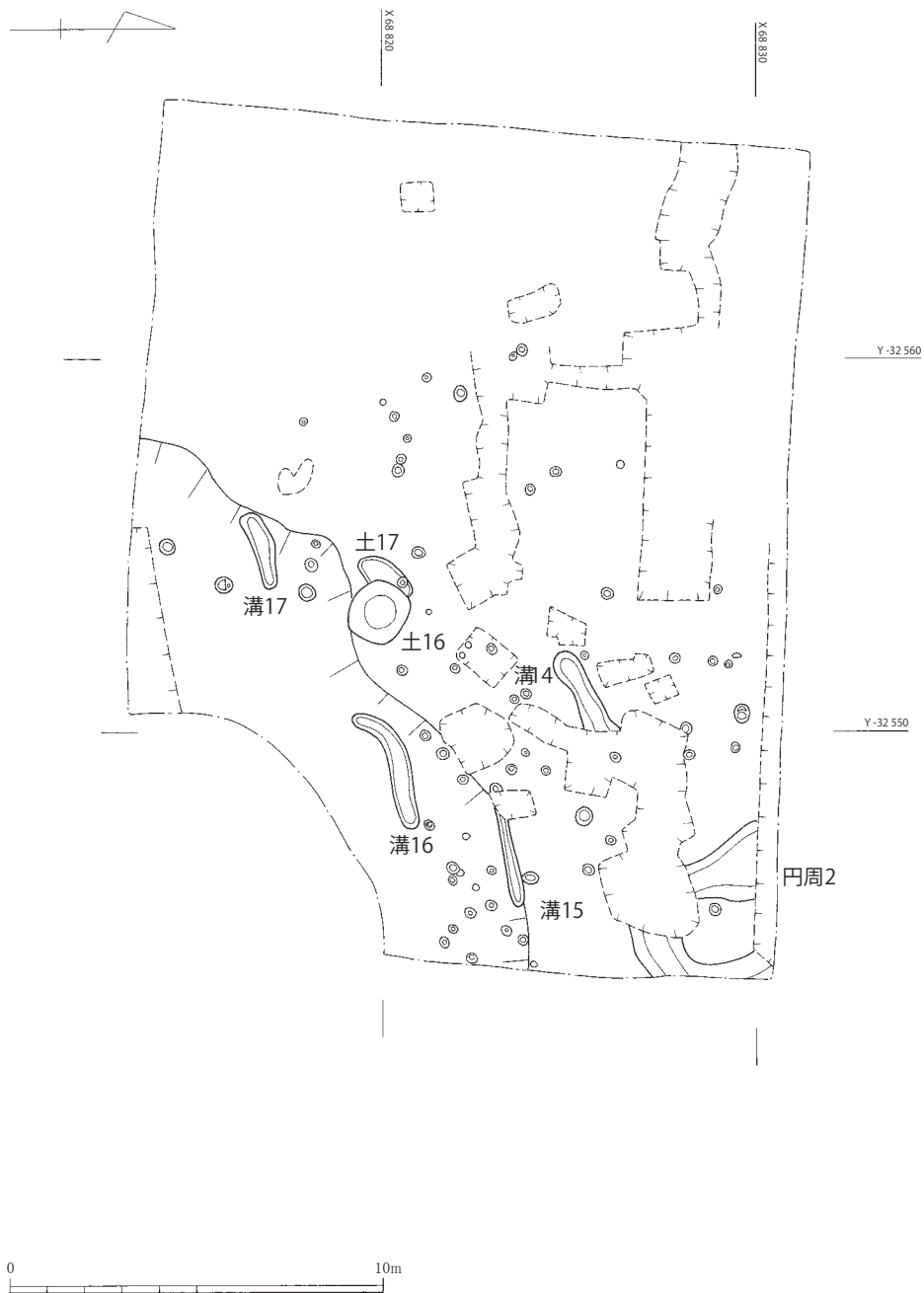
石器（15～17） 15は黒曜石製のスクレイパーである。1回の打撃により台形状の薄片を作り出し、刃部を細かく調整して作り出す。黒曜石は黒色で透明感がややある。16は玄武岩製の蛤刃石斧片である。基部が大きく失われているほか刃部も細かく割れて失われている。大型の優品である。27は輝緑凝灰岩製の石包丁である。刃部がとがった二等辺三角形を呈し背部はやや丸みをおびる。背部中央に細かい擦過痕を伴う微妙な凹凸があるほか、刃部中央の屈曲部付近にも削れてできたような凹みがあり、使用に伴う何らかの痕跡である可能性がある。穿孔は2箇所施されるが、いずれも回転穿孔ではなく細かい打撃を繰り返して穴を開けたもので特徴的である。

2 II区の調査

(1) 調査の概要

II区は、I区の南東側に位置する調査区である。I区の東側から南東側にかけては、試掘調査によって、削平が著しいもののわずかながら遺構の存在が認められた範囲である。このうち、北半部については工事計画の中で駐車場として利用することが示されており、調査範囲から外した。一方南側は、北側よりさらに遺構の分布密度が低いことが予想されたものの、建物を建てる範囲に含まれており、掘削により遺構が破壊されることから、ここに調査区を設定したものである（第2図）。広さは南北が約17m、東西が約24mをはかり、東西にやや長い長方形を呈する（第17図）。表土は大半が盛土で、南東側の落ち部に一部、宅地造成前の表土が残っていた。地山は白黄色粘砂質土で花崗岩の風化したマサ土であるが、I区よりも深部の土壌が露出しているとみられ、色調が明るく土質は硬かった。表土剥ぎ後に晴天が続いたため、土壌中の水分が失われて土壌がきわめて堅く乾いてしまい、掘り下げはおろか遺構検出のために土を削る作業でさえも大変手こずったほか、遺構検出面には宅地の基礎とみられる多数の攪乱坑があいていて、遺構の数が少ないにもかかわらず調査期間が長くなってしまった。

調査した遺構は、性格不明の土坑が2基、円形周溝が1基、溝が4条である。いずれの遺構もきわめて浅く、各遺構からの出土土器はほとんど見られないため、遺構の所属時期を推定する手がかりはないに等しい状態である。包含層や表土中などからも土器の小片が出土する程度であり、図示できる遺物はない。ただし、隣接する各調査区において、弥生時代中期に属する遺構以外のものはほぼないといってよく、調査された遺構は全てこの時期のものと考えて大過ないものと思われる。また、調査区南東側で地形の落ちを確認した。第1次調査区から続く丘陵斜面と考えられる。なお、落ちの傾斜は上位では比較的緩やかであるが調査区端部付近からやや傾斜を増しているようで、これを掘削すると大量の排土が出ると考えられたこと、排土中からは、新しい時期（近代以降）のものをのぞいて出土遺物も全く見られず遺構面にも明確な遺構を認めがたかったことなどから、途中で表土剥ぎを中止した。念のため調査区南東端部にトレンチを入れて確認したが、明白な地山であったことを付け加えておく。



第17図 II区遺構配置図(1/200)

以下、個別の遺構について説明していく。

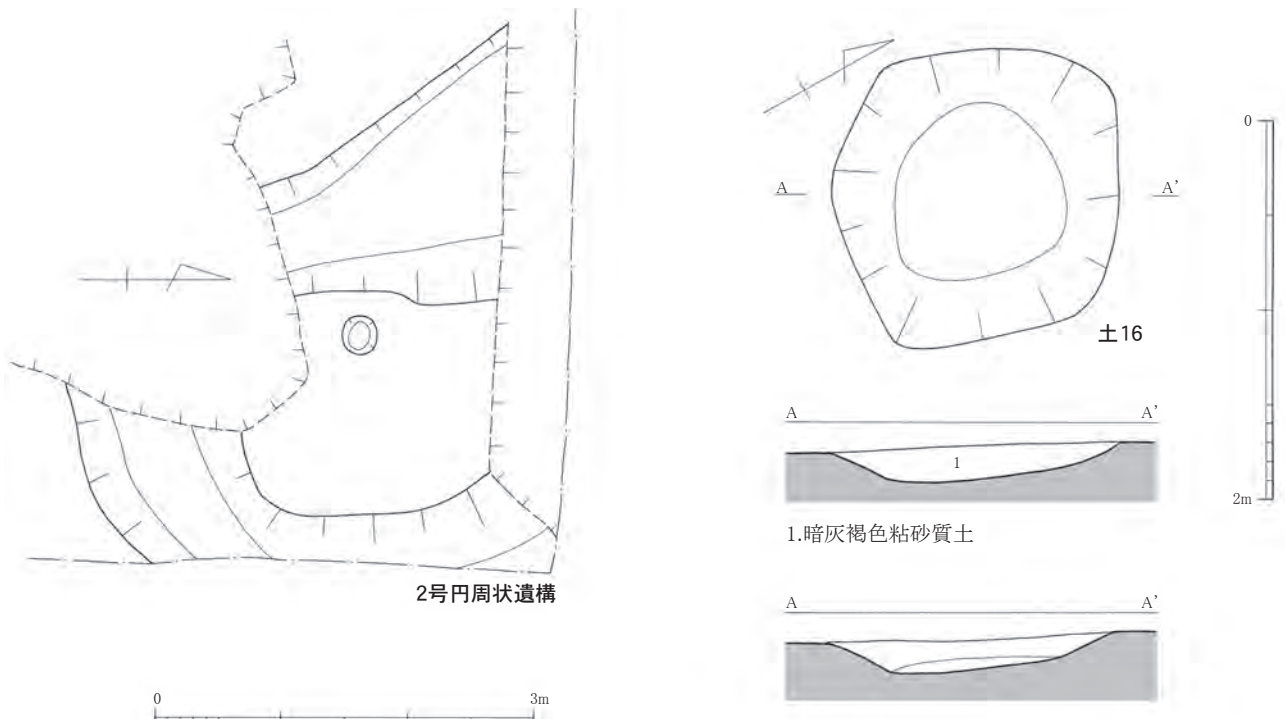
(2) 土坑

16号土坑 (第18図、図版9)

調査区南東側で17号土坑と切り合う形で検出された土坑である。平面形態は不整隅丸方形で、断面は浅い皿状を呈し、規模はおおよそ1.5m四方である。17号土坑を破壊しておりこれより新しい。出土土器はなく時期は不明である。

17号土坑 (図版9)

調査区の南東側で16号土坑と切り合う形で検出された土坑である。平面形態は不整長楕円形を示し、長軸を北東-南西に取る。東側1/4程が16号土坑により破壊されていて、本土坑が16号



第18図 16号土坑実測図(1/40)、2号円形周溝状遺構実測図(1/60)

土坑に先行するものであることを示している。深さはきわめて浅く、壁の大部分が削平により失われたものと考えられる。土坑内から出土遺物はなく、時期は不明である。

(3) 溝

14号溝 (第17図)

調査区の北東側を南西から北東方向に延びる溝状遺構である。深さはⅡ区の遺構群の中では比較的ある方で、しっかりとした掘り方をしている、断面は台形状を呈する。北東部の大半を攪乱溝により破壊されてしまっている。出土遺物はなく、時期は不明。

15号溝 (第17図)

調査区の東側中央部、ちょうど地形の落ち際の部分に掘られた細い溝である。略東西方向に延びるが、延長は4m弱で長く延びない。幅は狭いが深さはそれなりにありしっかりとした溝である。西側の一部を攪乱により破壊されている。出土土器はなく、時期は不明。

16号溝 (第17図)

調査区の東側端部に近い落ちの斜面の中で検出された溝である。深さはそれほど深くなく、幅も広いため、はっきりした溝とは見なしがたい。落ち際の地形に沿うように北東から南西方向に向かって延びており、延長線上に17号溝があるので、これらが一連の遺構である可能性もあるが、一応ここでは別々に取り扱っている。遺構からの出土遺物はなく、時期は不明である。

17号溝 (第17図)

16号溝の延長線上にやはり地形の落ち際で検出された溝である。やや浅く、はっきりした遺構であるかどうかやや自信がない。形状などは16号溝と共通する。出土遺物はなく時期は不明。

(4) その他の遺構

2号円形周溝状遺構 (第18図、図版9)

調査区の北東隅部で検出した溝状遺構。不整円形に溝が回るようになっており、一応円形周

溝状遺構として報告するが、一部が攪乱により破壊され、また北側の調査区外に延びているため、全形は不明であり、ほかの種類の遺構である(特に二つの溝状遺構を一つの遺構と見なし、してしまっている)可能性も排除できない。溝の深さは浅く、断面は皿状である。出土遺物はなく、時期は不明である。

IV まとめ

今回の調査では、性格不明の土坑と溝、多くのピットなどを調査し、出土土器から時期の判明する遺構はすべて弥生時代に属するものであった。また、近接する第1・2次調査区においても弥生時代に属する遺構以外のものは調査されておらず、今次調査においても、出土遺物などから時期がわからないものを含む大半の遺構が弥生時代中期に属するものと考えられる。

特異な遺構として2号土坑の存在を指摘しておきたい。報告したように2号土坑はこの時期の土坑としては例外的に規模が大きく、大きさは約4m×6m、深さが削平された状態で1m以上あって、壁が垂直に立ち上がるため、掘削時の土量は非常に大量であり、これを掘るのは大変な作業であったろうことが、調査時の経験から容易に想像できる。堆積土層は細分することができず急速に埋没したことが考えられるが、層界はレンズ状堆積の状況を示していて、人為的に埋められたものとは考えがたい。この遺構の類例は管見に触れず、今もって性格が不明である。東西に浅い溝状遺構のようなくぼみが接続していて、溝を伝って雨水がたまるような遺構-天水井戸-の可能性も考えたが決め手に欠ける状況である。類例をご存じの方はご教示願えれば幸いである。

最後に、本遺跡の意味について若干紙幅を費やすこととしよう。

小正彼岸原丘陵やその周辺の低丘陵域における弥生時代遺跡は、先に見たようにそのほとんどが弥生時代前期末前後に丘陵上に進出して、中期中葉頃には消滅してしまうというやや特異な動態を示す。これは、小郡市三国丘陵におけるそれとほぼ同じであり、おそらく同じような社会的・自然的背景によりもたらされたものであって、中期後半以後は墓域を丘陵上に残しつつ、丘陵裾部の河岸段丘上に広い耕地を開発すべく、集落を丘陵下へと移動させていったものとみられる。かの立岩遺跡群も例に漏れるものではない。そうした中において、彼岸原遺跡のみは丘陵上に残存して集落を拡大させる。なぜ彼岸原遺跡だけがこのような動きを持つのか。

飯塚市が今次調査区の南側約50mの地点で行った試掘調査では、南につきだした丘陵支脈先端部で弥生時代中期初頭頃の貯蔵穴を検出したという。遺構の種類から、前期末～中期前半のものと考えられる。おそらく、その後この集団は、丘陵頂部へと居住域を広げるとともに、東側の丘陵尾根上の集団と一体化して大規模な集団を形成し、その力で南側の谷部だけでなく周囲の河岸段丘上の開発も進めただろう。三国丘陵でいえば隈・西小田遺跡群と同じように、近隣に広い河岸段丘をもつという立地条件がそうさせたのかもしれないし、隈・西小田遺跡群の区画墓のように、集落を丘陵上に押しとどめておくための何かほかの条件が存在した可能性もあろう。いずれにせよ、彼岸原遺跡でも後期に至って集落は断絶しており、おそらくほかの集団のように低地に降りて直接低地の開発の乗り出したのではないだろうか。

なお、彼岸原遺跡の南側にあったという墓域-日上遺跡-は、おそらく中期後半における彼岸原遺跡群を構成した集団の一つが営んだものである可能性は高く、今後の検討の深化が望まれる。

图 版

1 調査区周辺地形
(西から)



2 調査区周辺地形
(東から)



3 調査区周辺地形
(北から)





1 調査区近景
(北から)



2 調査区近景
(南から)



3 調査区近景
(南東から)

1 I・II区全景
(上が南)



2 I区全景 (上が南)



3 II区全景 (上が南)



図版4



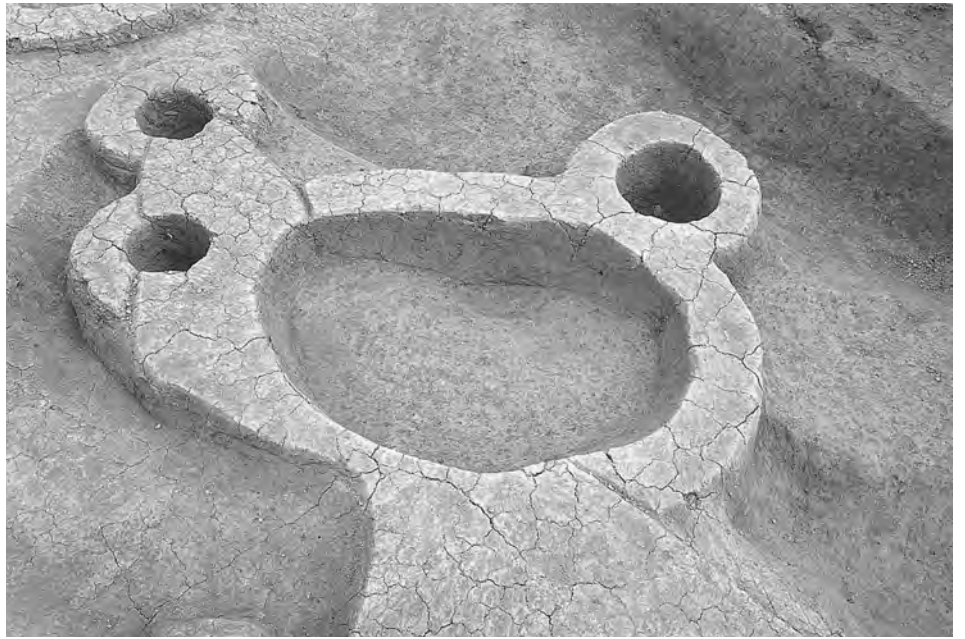
1 1号土坑（南から）



2 2号土坑（南から）



3 2号土坑土層（北東から）



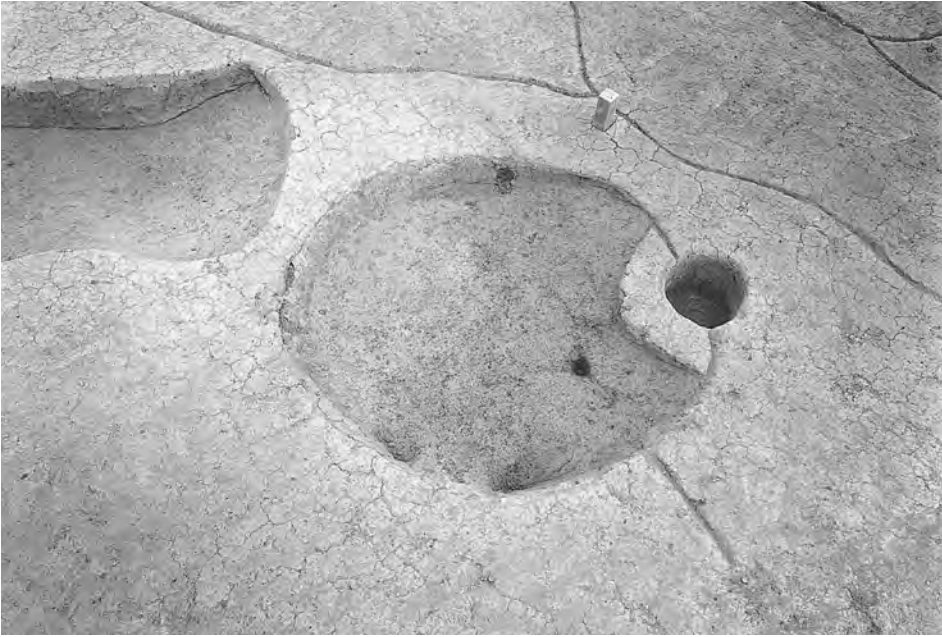
1 3号土坑（北西から）



2 4号土坑（南から）



3 5号土坑（西から）



1 6号土坑（北西から）



2 7号土坑（北から）



3 8号土坑（南から）

1 9号土坑（東から）



2 10号土坑（東から）

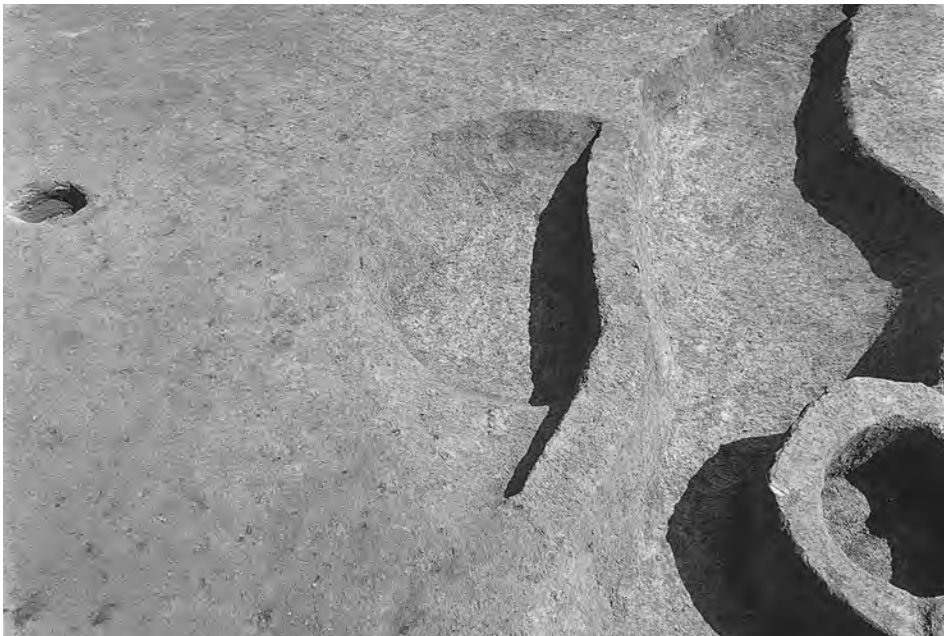


3 11号土坑（西から）





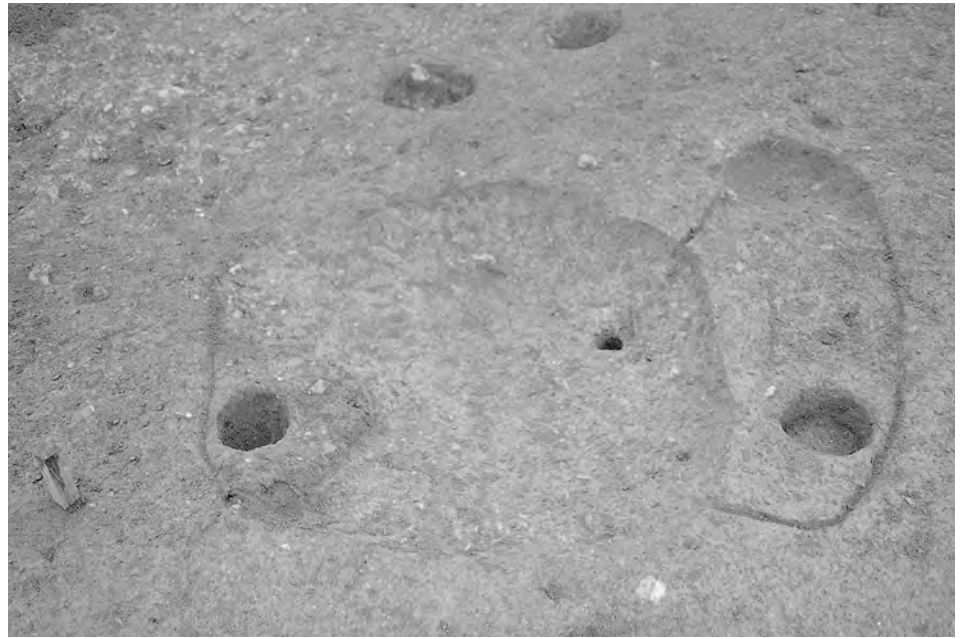
1 12号土坑（北西から）



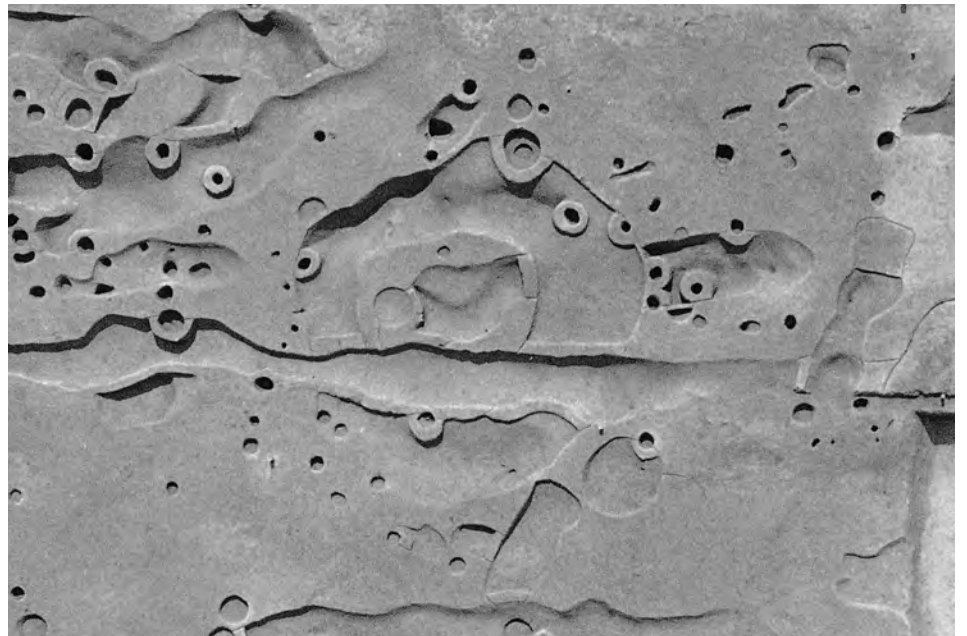
2 14号土坑（東から）



3 15号土坑（北から）



1 16・17号土坑（北から）



2 1号円形周溝状遺構（北から）



3 2号円形周溝状遺構（北から）



10-5



10-4



10-3



10-9



10-7



10-6



10-12



10-16



10-17



10-15



13-7



13-11



13-10



13-13



13-12



13-1



13-3



13-4



13-4



14-22



14-15



14-19



14-18



14-16



14-27



14-24



14-21



14-20



14-30



14-31



14-32



16-2



16-10



16-14



16-15



16-17



16-16

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひがんばるいせき 2							
書名	彼岸原遺跡 2							
副書名	県営彼岸原団地建替事業関係埋蔵文化財調査報告 2							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第241集							
編集者名	小澤 佳憲							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒818-0118 福岡県小郡市三沢5208-3 (Tel : 0942-75-9575, Fax : 0942-75-7834) HP : http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/							
発行年月日	2013年(平成25年) 3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがんばるいせき 彼岸原遺跡 だい 2 じ 第 2 次	ふくおかけんいづかし 福岡県飯塚市 おおあざべんぶん613 大字弁分613	40205	—	33° 37′ 12″	130° 38′ 56″	2009.08.03) 2009.09.30	1,200	県営団地 建替
要 約	<p>弥生時代中期後半の土坑・溝などを確認し、中期後半須玖Ⅱ式土器が多数出土した。東側に隣接する彼岸原遺跡第2次調査地で検出された弥生時代中期後半の集落の一部であり、西側周辺部に位置すると見られる。</p> <p>特に2号土坑は4×6mの方形で深さ1mと非常に大規模で他に類例がなく、特徴的な遺構で注目される。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 24	登録番号 0012

彼岸原遺跡 2
福岡県飯塚市弁分所在遺跡の調査
福岡県文化財調査報告書 第241集
平成25年3月29日
発行 九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3
印刷 セントラル印刷株式会社
〒810-0013 福岡市中央区大宮1-5-13

『彼岸原遺跡 2』(福岡県文化財調査報告書 第241集 訂正箇所

- ・ P ii 上から 3 行目……………「至る」 → 「いたる」
- ・ P iii 下から 10 行目…………… 「(1/40)」 → 「(1/60)」
- ・ P 14 最下行……………「(1/40)」→「(1/60)」
- ・ P 26 下から 3 行目……………「(第 18 図、図版 9)」→「第 18 図、」取る
- ・ P 27 挿図(16 号土坑実測図)の土層図……………レベル線上に「61.9m」入れる

以上、訂正願います。